

64-244



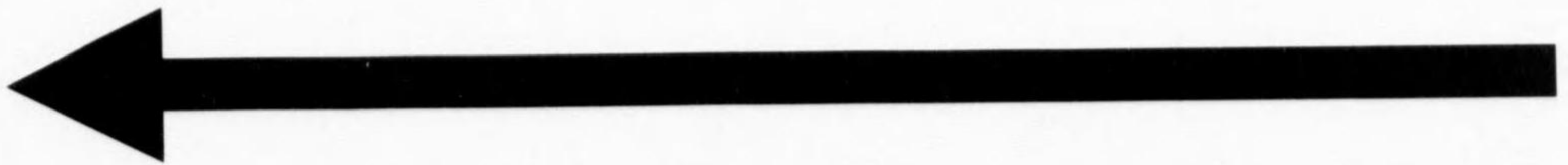
1200501278094

64

44



始





大久保利通文書



忠重君

大久保利通文書第二目次

卷六

一二九	吉井幸輔への書翰	慶應三年十月二日	一頁
【参考】	橋本八郎 <small>(品川彌二郎)</small> より吉井幸輔への書翰	慶應三年十月五日	三
一三〇	辻將曹への書翰	慶應三年十月七日	四
一三一	薩長藝三藩盟約書要目	慶應三年十月八日	六
【参考】其一	中御門經之より大久保への書翰	慶應三年十月四日	七
【参考】其二	岩倉公より大久保への書翰	慶應三年十月七日	九
一三二	討幕の宣旨降下を請ふ書	慶應三年十月八日	一一
一三三	討幕の宣旨降下を請ふ趣意書	慶應三年十月八日	一二
一三四	吉井幸輔への書翰	慶應三年十月九日	一七



【参考】吉井幸輔より大久保への書翰 慶應三年十月十日 一九

一三五 西郷吉之助への書翰 慶應三年十月十一日 二一

一三六 西郷吉之助への書翰 慶應三年十月十二日 二二

一三七 討幕の密勅請書 慶應三年十月十四日 二四

【参考】其一 薩藩へ賜はりたる討幕の詔書 慶應三年十月十三日 二六

【参考】其二 薩藩へ賜はりたる會桑二藩討伐の御沙汰書 慶應三年十月十三日 二七

【参考】其三 侯爵嵯峨實愛談話筆記 明治二十四年 二八

一三八 植田乙次郎への書翰 慶應三年十月十五日 三一

一三九 伊地知壯之丞への書翰 慶應三年十月廿三日 三二

一四〇 岩倉公に呈せし覺書 慶應三年十月 三五

一四一 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十六日 三六

一四二 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十七日 三七

一四三 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十八日 三八

一四四 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十九日 三九

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十一月十九日 四一

【参考】其二 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十月十六日 四二

一四五 岩倉公への書翰 慶應三年十一月廿一日 四三

一四六 岩倉公への書翰 慶應三年十一月廿四日 四五

一四七 岩倉公への書翰 慶應三年十一月二十七日 四八

【参考】岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十一月廿八日 五〇

一四八 岩倉公に呈せし覺書 慶應三年十二月五日 五一

一四九 養田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月五日 五三

一五〇 岩倉公への書翰 慶應三年十二月七日 六〇

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十二月七日 六二

【参考】其二 岩倉公より中山正親町三條兩卿への書翰 慶應三年十二月七日 六三

一五一 後藤象二郎への書翰 慶應三年十二月七日 六四

【参考】其一 岩倉公より中山忠能卿への書翰 慶應三年十二月六日 六五

【参考】其二 岩倉具定より中山忠能卿への書翰 慶應三年十二月六日 六六

【参考】其三 中山忠能卿より岩倉具定への返翰 慶應三年十二月六日 六七

【参考】其四 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十二月七日 六七

一五二 岩倉公への書翰 慶應三年十二月八日 六八

一五三 岩倉公への書翰 慶應三年十二月八日 七一

一五四 王政復古に關する建言書 慶應三年十二月八日 七二

一五五 岩倉公に呈せし警備配置覺書 慶應三年十二月 七六

【参考】西郷より岩倉公に呈せし禁門警衛部署覺書 慶應三年十二月 八三

一五六 養田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月十二日 八五

【参考】王政復古大號令 慶應三年十二月九日 九八

一五七 岩倉公への書翰 慶應三年十二月十五日 一〇一

【参考】岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十二月十六日 一〇三

一五八 西郷吉之助への書翰 慶應三年十二月廿一日 一〇五

【参考】寺島陶藏より大久保への書翰 慶應三年十二月廿一日 一〇八

一五九 西郷吉之助への書翰 慶應三年十二月廿一日 一一一

一六〇 品川彌二郎への書翰 慶應三年十二月廿一日 一一三

一六一 寺島陶藏への書翰 慶應三年十二月廿二日 一一四

【参考】寺島陶藏より大久保への書翰 慶應三年十二月廿五日 一一五

一六二 太政官代及び徳川氏處分に關する覺書 慶應三年十二月 一一七

一六三 岩倉公への書翰 慶應三年十二月廿三日 一二九

一六四 岩倉公への書翰 慶應三年十二月廿四日 一二一

一六五 品川彌二郎への書翰 慶應三年十二月廿五日 一二五

一六六 桂右衛門への書翰 慶應三年十二月廿八日 一二六

一六七 養田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月廿八日 一二八

一六八 藩廳への京都事情報告書 慶應三年十二月二十八日 一三一

卷七

一六九 西郷吉之助への書翰 明治元年正月二日 一四七

【参考】其一 尾越兩侯への内命書 明治元年正月三日 一四八

【参考】其二 西郷吉之助より大久保への書翰 明治元年正月三日 一四九

【参考】其三 西郷吉之助より大久保への書翰 明治元年正月三日 一五〇

一七〇 外國公使上京に關する御沙汰書案 明治元年正月二日 一五一

一七一 岩倉公に呈せし意見書 明治元年正月三日 一五四

一七二 三條岩倉兩公に呈せし覺書 明治元年正月三日 一五八

一七三 三條岩倉兩公に呈せし覺書 明治元年正月三日 一六〇

一七四 岩倉公に呈せし覺書 明治元年正月三日 一六二

一七五 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年正月五日 一六三

【参考】其一 西郷吉之助より大久保への書翰 明治元年正月廿四日 一七二

【参考】其二 薩藩より朝廷に上れる願書草稿 明治元年正月 一七三

一七六 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年正月十日 一七四

一七七 蓑田傳兵衛への別啓書翰 明治元年正月十日 一八二

一七八 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年正月十六日 一八五

一七九 大坂遷都の建白書 明治元年正月廿三日 一九一

【参考】西郷吉之助より大久保への書翰 明治元年正月廿六日 一九六

一八〇 桂右衛門への書翰 明治元年正月廿九日 一九七

一八一 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年二月朔日 二〇〇

一八二 蓑田傳兵衛への追啓書翰 明治元年二月朔日 二〇三

【参考】久光公より大久保等への感狀 明治元年正月十七日 二〇四

一八三 徳川氏征討の布告案 明治元年二月朔日 二〇五

【参考】西郷吉之助より大久保への書翰 明治元年二月二日 二〇七

一八四 岩倉公に代り起草せる親征に關する意見書 明治元年二月朔日 二〇八

一八五 小松帶刀への書翰 明治元年二月十日 二一一

【参考】小松帶刀より大久保への書翰	明治元年二月十五日	二一三
一八六 蓑田傳兵衛への書翰	明治元年二月十六日	二一五
【参考】忠義公より朝廷に上れる十萬石返獻の願書	明治元年二月十一日	二二四
一八七 徳川氏處分に關する意見書	明治元年二月	二二六
一八八 宮廷改革に關する意見書	明治元年二月	二二七
一八九 得能良介への書翰	明治元年三月廿三日	二三〇
一九〇 得能良介への書翰	明治元年三月廿五日	二三二
一九一 松方助左衛門への書翰	明治元年三月廿八日	二三三
一九二 岩倉公への上書	明治元年三月廿九日	二三四
一九三 得能良介への書翰	明治元年三月廿九日	二三七
一九四 得能良介への書翰	明治元年三月三十日	二三九
一九五 得能良介への書翰	明治元年三月三十日	二四〇
一九六 米澤藩への御沙汰書案	明治元年三月	二四一

卷八

一九七 長藩木原又右衛門上申の大要覺書	明治元年四月四日	二四三
一九八 吉井幸輔への書翰	明治元年四月十一日	二四七
【参考】西郷吉之助より大久保への書翰	明治元年四月五日	二四八
一九九 得能良介への書翰	明治元年四月廿一日	二五一
二〇〇 三條岩倉兩公に呈せし建言書	明治元年四月	二五三
二〇一 時勢に關する意見覺書	明治元年四月	二五五
二〇二 木戸孝允への書翰	明治元年閏四月二日	二五七
【参考】木戸孝允より大久保への書翰	明治元年四月二十九日	二六四
二〇三 得能良介への書翰	明治元年閏四月五日	二六八
二〇四 岩倉公への書翰	明治元年閏四月六日	二六九
二〇五 岩倉公に呈せし書	明治元年閏四月七日	二七一
二〇六 徳川氏處分に關する建言書	明治元年閏四月	二七三

二〇七	三條公への御沙汰書案	明治元年閏四月	二七七
二〇八	岩倉公に呈せし覺書	明治元年閏四月	二七九
二〇九	斐田傳兵衛への書翰	明治元年閏四月八日	二八〇
二一〇	岩倉公への書翰	明治元年閏四月八日	二八三
二一一	得能良介への書翰	明治元年閏四月十日	二八四
二一二	鴻雪爪への書翰	明治元年閏四月十日	二八五
二一三	制度改定に關する意見書	明治元年閏四月	二八六
二一四	岩倉公への書翰	明治元年閏四月十三日	二八八
二一五	得能良介への書翰	明治元年閏四月十八日	二九三
二一六	岩倉公への書翰	明治元年閏四月廿一日	二九四
二一七	岩倉公への書翰	明治元年閏四月廿三日	二九五
	【参考】岩倉公より大久保への書翰	明治元年閏四月廿三日	二九七
二一八	斐田傳兵衛への書翰	明治元年閏四月廿三日	二九八

二一九	岩倉公への書翰	明治元年五月朔日	三〇三
	【参考】岩倉公より大久保への書翰	明治元年五月朔日	三〇四
二二〇	岩倉公への書翰	明治元年五月六日	三〇五
	【参考】岩倉公より大久保への書翰	明治元年五月六日	三〇六
二二一	岩倉公に呈せし意見書	明治元年五月八日	三〇九
二二二	得能良介への書翰	明治元年五月十七日	三一二
二二三	得能良介への書翰	明治元年五月十八日	三一三
二二四	小松帶刀への書翰	明治元年五月十九日	三一三
二二五	岩倉公への書翰	明治元年五月廿日	三一六
二二六	吉井幸輔への書翰	明治元年五月廿日	三一七
二二七	吉井幸輔への書翰	明治元年五月廿一日	三一九
二二八	得能良介への書翰	明治元年五月廿七日	三二〇

卷九

二二九	五代才助への書翰	明治元年六月八日	三二三
二三〇	五代才助への書翰	明治元年六月十二日	三二四
二三一	宿許彦熊伸熊三熊への書翰	明治元年六月十七日	三二五
二三二	岩下佐次右衛門への書翰	明治元年六月廿九日	三二八
二三三	岩下佐次右衛門への別啓書翰	明治元年六月廿九日	三三〇
二三四	岩倉公への書翰	明治元年七月十六日	三三五
二三五	岩下佐次右衛門への書翰	明治元年七月十六日	三三八
二三六	中井弘藏への書翰	明治元年八月三日	三四一
二三七	木戸孝允への書翰	明治元年八月七日	三四二
二三八	中井弘藏への書翰	明治元年八月十二日	三四六
二三九	中井弘藏への書翰	明治元年八月十二日	三四七
二四〇	木戸孝允への書翰	明治元年八月十六日	三四九
二四一	木戸孝允への別啓書翰	明治元年八月十六日	三五三

二四二 木戸孝允への書翰 明治元年八月十七日 三五七

【参考】三條公より岩倉公への書翰 明治元年八月十四日 三五九

二四三	木戸孝允への書翰	明治元年八月十七日	三六一
二四四	中井弘藏への書翰	明治元年八月廿三日	三六五
二四五	山口範造中井弘藏への書翰	明治元年八月廿五日	三六六
二四六	中井弘藏への書翰	明治元年八月廿七日	三六七
二四七	中井弘藏への書翰	明治元年八月三十日	三六八
二四八	山口範造中井弘藏への書翰	明治元年八月三十日	三六九
二四九	中井弘藏への書翰	明治元年九月三日	三七〇
二五〇	小松帶刀岩下佐次右衛門への書翰	明治元年九月四日	三七二
【参考】	勝安芳より大久保への書翰	明治元年八月廿六日	三七七
二五一	小松帶刀岩下佐次右衛門への復啓書翰	明治元年九月四日	三七九
二五二	木戸孝允への書翰	明治元年九月五日	三八二

【参考】木戸孝允より大久保への書翰 明治元年八月廿八日 三八七

二五三 木戸孝允への副啓書翰 明治元年九月五日 三九一

二五四 木戸孝允への副啓書翰 明治元年九月五日 三九三

二五五 木戸孝允への書翰 明治元年九月六日 三九四

【参考】三條公より岩倉公への書翰 明治元年九月六日 四〇四

二五六 中井弘藏への書翰 明治元年九月六日 四〇九

二五七 山口範造中井弘藏への書翰 明治元年九月七日 四一〇

二五八 岩倉公への書翰 明治元年九月十六日 四一一

【参考】其一 三條公より岩倉公への書翰 明治元年九月十四日 四一二

【参考】其二 三條公より岩倉公への書翰 明治元年九月廿五日 四一四

二五九 岩倉公の諮問に對する答申書 明治元年九月 四一五

二六〇 鎮將府の改革に關する意見書 明治元年九月 四二二

二六一 菱田傳兵衛への書翰 明治元年九月廿三日 四二五

卷十

二六二 勝安芳への書翰 明治元年十月四日 四二九

【参考】其一 勝安芳より大久保への書翰 明治元年十月四日 四三〇

【参考】其二 東京奠都祭を行はんとせし時勝伯より有志者に與へし書 四三一

【参考】其三 東京奠都三十年祭勝伯懷舊談 四三二

二六三 木戸孝允への書翰 明治元年十月四日 四三五

二六四 中井弘藏への書翰 明治元年十月五日 四三七

二六五 小松帶刀岩下佐次右衛門への書翰 明治元年十月五日 四三八

二六六 小松帶刀岩下佐次右衛門への再啓書翰 明治元年十月五日 四四〇

二六七 得能良介への書翰 明治元年十月十日 四四二

二六八 岩倉公への書翰 明治元年十月十六日 四四五

二六九 岩倉公への書翰 明治元年十月廿日 四四六

二七〇 岩倉公への書翰 明治元年十月廿七日 四四七

二七一	岩倉公への書翰	明治元年十一月十四日	四五二
	【参考】岩倉公より大久保への書翰	明治元年十一月十四日	四五二
二七二	得能良介への書翰	明治元年十一月十四日	四五三
二七三	岩倉公への書翰	明治元年十一月廿一日	四五六
二七四	岩倉公への書翰	明治元年十一月廿二日	四五九
	【参考】還幸其他時務に關する岩倉公の意見書	明治元年十一月廿二日	四六〇
二七五	岩倉公への書翰	明治元年十一月廿四日	四六六
	【参考】勝安芳より大久保への書翰	明治元年十一月廿三日	四六八
二七六	岩倉公への書翰	明治元年十一月廿九日	四七〇
二七七	岩倉公に呈せし書	明治元年十一月	四七二
二七八	岩倉公への書翰	明治元年十二月十日	四七八
二七九	桂右衛門への書翰	明治元年十二月十四日	四八二
二八〇	桂右衛門への書翰	明治元年十二月十六日	四八五

二八一	新納嘉藤次への書翰	明治元年十二月廿二日	四八六
二八二	木戸孝允への書翰	明治元年十二月廿四日	四八七
二八三	木戸孝允への別封書翰	明治元年十二月廿四日	四九〇
二八四	岩倉公への書翰	明治元年十二月廿五日	四九二
二八五	岩倉公への別啓書翰	明治元年十二月廿五日	四九七
二八六	軍務官の人撰に關する意見書	明治元年	四九九
二八七	政府の威嚴に關する建言書	明治元年	四九九

二八〇 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八一 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八二 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八三 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八四 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八五 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八六 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八七 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八八 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二八九 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日
 二九〇 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日

大久保利通文書卷六

一二九 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月二日

(大久保家藏)



【按】藝藩ノ藩論一變セシコトヲ在坂吉井へ通シタルモノナリ
 昨日之貴翰相達別昏三通慥ニ落手いたし其后愈振起確乎無動搖趣不堪欣
 然候然處一昨廿九日辻將曹小大夫に参り引合候次第別々案外之至其趣ハ
 植田乙次郎廿三日ニ歸藝廿五日ニ又々長州に被差越候由於國元評議之形
 行ハ當分ニ形體ニ幕府ニおひても益用心堅固ニ以し中々意表ニ出ル
 ト申儀も難調尤只今出張

皇國之御爲ニ相成ルト見据も無之候付先登坂之事見合候方可然与之趣意
 ニ亦植田再行いし候段只今從國元申越候与之事候由實ニ言語ニ絶候次
 第二御坐候乍去長之處ハ御國ト別段引合之末藝之説ニ依テ可動筋も無

御坐候へとも少々ハ又手間取候事ニ有御坐ましくや甚懸念ニ御座候右々定る品川出立后相成同人ハ存知無之筈与相考申候何日頃同人出立相成候事右之形行帶刀殿ハ御問越相成候半とも奉存候得共爲御心得申上置候最初より頼与ハ不致事候へ共そ位須臾反復ハ有之ましく与存候處齒牙ニ被懸不申候此旨飛脚歸便ハ艸々申上候已上

十月二日

大久保一藏

吉井幸輔様

侍史

追々未寸切与無之甚込入申候内輪ニ一條類ニ承_レ只々心せま候次第
御坐候

【解説】藝藩ノ植田ハ曩ニ宮市ニ於テ利通ト會見スルヤ尋テ山口ニ往キ長藩ト打合ヲ了シ爾來薩兵ノ到着ヲ待チシカ會マ同藩ノ辻維岳ハ土藩ノ後藤象二郎等カ主張セシ佐幕調和論ニ左

袒シ隨テ藝藩ノ國論ハ一變セントシ薩長トノ同盟ヲ躊躇スルニ至リシナリ書中品川出立后云々品川ハ三日晩大坂ヨリ入京初メテ藝藩ノ近情ヲ知リ大ニ其重臣寺尾生十郎ヲ詰責シタルナリ寸切ハ病氣全快ニ至ラサルノ意ナリ左ニ品川ノ書翰アリ

【参考】橋本八郎(品川彌二郎)より吉井幸輔への書翰慶應三年十月五日(大久保家藏)

先以御安康御盡力可被爲在と奉敬賀候小子義一昨晚無異入京西郷君ニ御旅館ニ潜居仕候間乍失敬此段御放念可被成下候出立之節御内談申上置候件々書取ニ致し差出候處一々御同意と申事ニて誠ニ難有安心此事奉存候就ハ直ニ下坂可仕覺悟罷在候處藝の寺尾事とふも掛念ニ廉不少ニ付今朝石清^{是も藝人}ヲ同行致し船越洋之介ニ處へ行疑惑之件々汝尋問仕直々船越平山同道ニて寺生の處ニ行書面ニ一條其外イタク詰問仕候處婦女子ニ申様言葉計り吐キ實ニ憤懣ニ堪へ不申國元の様子と大きニ相違の廉も有之候ニ付君公ハ實々御盛意ヲ是非貫徹致

きき候様申置幕前ニ引取申候歸途大久保君之處ニ立寄候處幸西郷君も御出ニ相成居旁之處御話申上候處外ニ少々用事出來明日丈ヶハ滯京之賦リニ御座候間左様御承知可被成下候巨細の事ハ下坂之上篤と御談し可申上候得とも右之段一應申上置候其内時氣御自愛爲御國家奉祈候も々々歸坂之節と閣筆

十月五日夜

八郎拜

幸輔様

貴下

尙々蒸船之處も余程隙取いゝやと實以掛念此事奉存候何卒御鑑着次第早々御報知之程奉待候

一三〇 辻將曹への書翰 慶應三年十月七日

(大久保利武藏)

【按】三藩ノ同盟ニツキ集會ヲ約シタルモノナリ

爾來不奉得拜顔候得共先以御安祥被爲渡大慶奉存候然も明日御參集之一條從廣澤承別の大幸此事ニ奉存候就而場所之儀此方より取究申上候様与之趣承知仕折角閑靜之方取調候得共差當宜舖處無御坐些遠方ニ甚恐入候得共上立賣の兼而弊藩下宿申付置候閑亭御坐候付其方は御一同御光芻被成下候様奉願度左候而刻限之義ハ早目之方仕合御坐候間五ツ時より御出懸被下候様致度晝後ハ無據用向有之候付其段分而奉願置候此旨所用迄不取敢以紙面奉得尊慮候餘拜接ニ申殘候謹言

十月七日夜

大久保一藏

辻將曹様

侍史

追テ場所之儀も從此方御案内之人差上候付左様御得心被下度奉願候

【解説】藝藩ハ曩ニ一旦同盟ヲ破約セシカ其後長藩ノ廣澤眞臣

カ藝藩ノ植田ト共ニ着京シ利通等ト會合スルニ及ヒ藝藩ノ國

論再變セシ事情判然セシヲ以テ利通等ハ八日改メテ藝藩ノ辻
植田寺尾・長藩ノ廣澤品川等ト會合シ再ヒ三藩同盟ノ議ヲ決定
スルニ至リ廣澤植田ト同道シテ中山卿ニ謁シ盟約ノ次第ヲ言
上セリ次ニ掲クル盟約書ハ利通自ラ起案シタルモノナリ

一三一 薩長藝三藩盟約書要目 慶應三年十月八日

(尊攘堂藏)

【按】薩長藝三藩盟約書ノ要目ニシテ利通ノ執筆セシモノナリ

要目

- 一 三藩軍兵大坂着船ニ一左右次第
- 朝廷向斷然ニ御盡力兼テ奉願置候事
- 一 不容易御大事ニ時節ニ付爲
- 朝廷抛國家必死盡力可仕事
- 一 三藩決議確定之上ハ如何ニ異論被 聞食候共

御疑惑被下間舖事

三藩

連名

【解説】藝藩ノ國論一變シ三藩ノ討幕破綻ノ形勢アルヤ中御門
卿ハ大ニ之ヲ憂ヘ窃カニ利通ニ書ヲ贈リ會見ヲ求メタリ幸ニ
十月八日三藩重臣ノ會議ニ於テ同盟モ前議ニ復シコノ誓約書
ヲ協定シ直ニ之ヲ岩倉中御門大原三卿ニ報告シ同時ニ討幕ノ
宣旨降下ヲ朝廷ニ請フニ至リシナリ(利通日記參照)

【參考】其一 中御門經之より大久保への書翰 慶應三年十月四日 (大久保家藏)

追吳々御苦勞存候得其實ニ密々御談申入度義ニ付何卒其邊御舍
頼入候大卿へ内々ニ譯も委細御面談可申入候何卒御承知頼入存
候

雨下濛然候彌御勇健珍重候誠ニ過日去於大原家面會種々預教示忝存

候抑甚々御苦勞之義御頼申兼候得共甚心痛之義差起極内々御相談申入度候付何卒今明日之内愚亭へ御入來相成間敷候哉彼嫌疑も有之候義暮早々ヨリ御入來頼入度存候併夫も御困リ候え於陽明家御面談申入候亦も宜候間此邊無御遠慮可被示聞候若陽明家ニ御面談ニも候ハ、不計參上之振合ニ若御出仕候ハ、面會致度旨取次之者へ可申入候其御心得ニ頼入候且今明何レ之方御勝手哉御一筆御示頼入候今度御面談申入度一條實ニ密々之義大原へも極内々頼度委細ハ面上可申述候吳々御苦勞千萬存候得共大心配之件ニ付極密々御頼申入候於御領掌ハ千萬忝存候尙何も面上ト早々如此候也

十月四日

和樂

大久保市藏殿

極秘

御一覽後御火中頼入候

【参考】其二岩倉公より大久保への書翰慶應三年十月七日

(大久保家藏)

尙々昨日之出會實ニ令喜悅候今日之機誓亦不可失事と祈念之外無之申すも愚ニ候得共此上益御盡力頼入候品川にも宜敷御鶴聲可給候也

昨日久々ニ出會多年之宿志貫徹欣喜此事ニ候爾來彌御壯健令賀候扱今朝ハ兩士上京云々彼卿ハ御通達早速令傳承候幸甚不過之程ホク山卿入來之旨ニ候間萬々熟談午後否可申入候將内密入一覽候二通之儀ハ實以大事ある物ならん聊忌憚かく存分ニ作文之事偏ニ頼入候若し急迫場合ニ至り卒爾之品出來候ハ萬世之遺憾右ニ付始メ書試候一紙又々見合ニもと差出候兎も角吳々よろしく頼存候早々以上

十月七日

對岳

大久保殿

【解説】十月五日利通中御門卿ノ邸ニ至ル卿曰ク藝藩國論一變

シ同盟ヲ躊躇スルノ態アリ甚憂フヘキニ非スヤト利通答ヘテ
 曰ク藝藩ノ國論假令變動スルモ薩長兩藩ノ力能ク王政復古ノ
 大業ヲ贊襄スルニ足ラント中卿心始テ安ンシ更ニ明日ヲ以テ
 己レカ岩倉村ノ別莊ニ岩倉卿ト共ニ相會センコトヲ約ス六日
 利通ハ品川彌二郎ヲ伴ヒ石藥師ノ家ヲ出テ岩倉村ニ至リ岩倉
 中御門兩卿ニ見ヘ薩長兩藩ノ同盟ハ敢テ動カス益勤王ノ素志
 ヲ貫徹スヘキヲ述ヘシカ岩倉公ハ討幕回天ノ大業決行ニツキ
 先ツ大變革ノ詔勅及ヒ太政官ノ職制案ヲ示シ熾仁親王ヲ以テ
 知太政官事ト爲シ仁和寺宮ヲ以テ征討大將軍ト爲サントノ商
 議アリ且ツ錦旗調製ノコトヲ托セラレタリ岩倉公ハ大ニ此日
 ノ會合ヲ喜ヒ前記ノ手簡ヲ利通ニ贈リテ益兩藩ヘ依頼ノ意ヲ
 示サレタルナリ

一三二

討幕の宣旨降下を請ふ書

慶應三年十月八日（公爵島津忠永君藏）

【按】討幕及ヒ王政復古ノ宣旨ヲ降下サレンコトヲ請ヒタルモ
 ノナリ

皇國內外の御危急不可謂の状態別紙趣旨書を以て申上候通にて寶祚の存
 亡ニ相拘り候御大事の時節苟安を偷み傍觀默止難仕爲國家干戈を以て其
 罪を討ち奸兇を掃攘し王室恢復の大業相遂度不可制の忠義暗合會盟斷策
 義舉に相及候ニ付伏冀くは相當の宣旨降下相成候處御執奏御盡力被成下
 度奉願候

慶應三年丁卯十月

小松帶刀

西郷吉之助

大久保一藏

中山前大納言様

正親町三條大納言様

【解説】利通等ハ藝藩ノ辻將曹植田乙次郎長藩ノ廣澤兵助品川彌二郎等ト會合シ三藩同盟主政復古斷行ノ議ヲ決シ利通ハ廣澤植田ト共ニ中山中御門二卿ニ謁シ三藩ノ決議書ヲ提出セシカ利通等ハ彌王政復古ヲ斷行スルニハ豫メ宣旨ノ降下ヲ必要ナリトシ是日三人ノ連署ヲ以テ本書ニ次ニ掲クル趣意書ヲ添ヘテ三卿ニ上リタルナリ本書ニ長藩士ノ名ヲ省キタルハ未タ朝譴ヲ解カレサルニ因ル

一三三 討幕の宣旨降下を請ふ趣意書

慶應三年十月八日（公爵島津忠承君藏）

即今皇國の形勢を推考熟慮するに乍恐舊臘

先帝崩御

新帝御幼弱に在りましたし天下諒闇の時に方り萬人悲歎號泣實に

皇國の御厄運御大事無此上候處近年外患内憂日に月に差迫り不可謂の御危急

寶祚の命脈存亡に可相係折柄にて深淵薄氷之心地晝夜忘寢食苦慮致候次第あるに於幕府は癸丑甲寅以來違勅調印取結其餘失體之條々不少畢竟朝廷へ奉對君臣之大道を取り失ひ就中幕府閣老連署にて七八年乃至十ヶ年には必然攘夷成功を可遂と御約束

皇妹の降嫁を乞ひ候等欺罔萬端其餘偏執邪曲放肆縱橫之政令人望殆んと盡き痛怨離叛の極終に上巳上元の變故或は大和筑波の擾亂と相成殊に御再討以來人心恟々米價騰貴諸色高料民不堪命して京攝間畿内の商民混亂をも相生し候ニ至り且又防長の儀甲子冬尾張總督御征伐として被差向三謀臣首級備實檢伏罪之道相立解兵相成

朝廷寛大仁恕之御趣意を以て五卿護送大膳父子出府等の暴令を聞き早々大樹公上洛有之候様乙丑三月再應 勅命を下し賜りしを御請無之のみか

らす不容易企有之趣を以て再討として大軍を率ゐ御進發上洛參朝の節尙
ほ寛裕之聖慮を以て被及御沙汰候御書面返上同冬大小監察下藝一應御糺
明有之候處御不審筋無之候に軍勢御引揚も無之大膳父子塾居與丸家督十
萬石削地の御裁許被仰渡爲名代差出置候家老宍戸備後介等御拘留に相成
右御處置に付ては長防士民歎願中父子達命も不及内期日を刻し問罪の
師を被差向梗命の者御誅鋤之布告候處丙寅六月七日より大島郡へ亂入無
辜の婦人小兒迄襲殺之暴舉よりして始て戰と相成天下の大亂を引出し幾
許の蒼生を殺し暴戾慘刻の所爲絶言語次第あり固より無名の妄舉條理顛
倒の始末長防士民中に於て堂々たる

天幕の旗旆を奉迎望道理も無之於是天下益々異議を生し憂國の諸藩(尾州越州四州備州藝州阿州宇和島薩州)名分大義を論し屢々建言致し候得共反て嫌疑に觸れ同八月
言上の趣有之爲名代一橋中納言追討として下藝御暇迄も相濟候處九州出
兵の諸藩解兵の一左右を以て忽ち名代發向追討の御斷被仰立大樹公の喪

に依り兵事見合候様 御沙汰相成尙ほ諸藩を被召見込御推問衆議歸着す
る處を以て御處置可被成旨被遂言上昨冬より追々諸藩上京及當春再應之
詔命に奉應於四藩も拜趨致候形行に候處前件幕府從來の失體より災害百
出事蹟顯然就中長防再征討の始末是非曲直瞭然相分り候得て大樹公御繼
業御維新の時に被爲當善惡邪正の分御猛省斷然反正悔悟天下之公議に被
爲則

朝廷尊奉百姓撫恤列藩を親み納諫求治國事御奮勵被爲在候得て拯溺扶顛
之御功業相遂け
皇國之治可足見と四藩談合決議再三登營之上言上長防之儀御行掛りの事
に候へは第一大膳父子官位復舊平常の御沙汰ニ被及候ハ、御反正之實蹟
相顯れ國內和同一致の基本も相立候筋合に候間次に兵庫開港事件に被及
順序可相適旨を以て及諍議置候處終に五月廿三日大樹公參内兩事件言上
朝廷紛議衆評御一定に至り兼候得共強て被遂 奏聞無御餘儀御沙汰相發

し全く兩三の御方にて御私決相成候姿に候處四藩も同様言上云々御文言等事實顛倒致し再三御伺よも相及候然るに長防寛大之處置早々取計候様御沙汰の處不可行妄議を以て時日を遷延候内藝州も上京四藩同様の趣意を以て屢及建言候得共是亦度外に差置今日の次第に相及ひ實に不堪慨歎痛切之至候抑も征夷將軍の職任たるや誠心を披き公道を布き撥亂濟世の職を被盡候て社當然の事に候處反て列藩の公議を退け蔽非遂邪の御趣意増長相成候儀徳川氏衰運の然らしむる所以歟將た天不祚 宗社の謂乎今日大樹公列藩公議の御取捨は御心術の正否に依る處御心術の正否は皇國の浮沈に係する所

皇國の浮沈に係する何をか是より大ならん此時に方り苟も安を偷み傍觀黙止する時は益す禍心相募り

朝廷を掌握し暴政意の如くにし外患内憂一層の大事に相及ひ般鑑不遠戊午以來

皇國今日の大難あらんことを恐れ憂國の諸藩東西に奔走し王事に鞠躬して國家疲弊し終に斃れんと欲して止まず今般の一舉とある人事既に至れり盡せり前件重大の罪跡明かに御心術正否著く

皇國浮沈の機燦然たる上ハ寸毫も餘論を容るゝの地無之候に付大義の所在を明にし

王室恢復の赤心を貫徹し干戈を以て其罪を討し奸兇を掃攘して國家長久の基を開き上奉安

宸襟下萬民塗炭の苦を救済し萬死を以藩屏の任を盡し累代の鴻恩を奉報度今此兩三藩不可制の忠義暗合奉 朝命揚大義敢て吞噬奪攘の意端に不出の至情を陳述する者あり

一三四 吉井幸輔への書翰 慶應三年十月九日

（大久保家藏）

【按】長藩トノ出兵協約ニ齟齬ヲ生シタルヲ以テ在坂ノ吉井ニ

寄書シ廣澤ノ上京ヲ促シタルモノナリ

尙々自ら藝藩一左右ニ廣生出立ニ可相成ト存候得共爲念別番早々
差出候 朝廷向十分ニ相成候處如此種々之間違到來甚不堪慨歎候
御安康被成御滯坂奉大慶候廣澤氏下坂ニ愛元形行委曲御承知之筈ト奉
存候然處今日長本國ノ福田某上京ニ一舉見合之談判として被差越候ト
申も三田尻へ御國船之來舶遅々四日迄も何る事無之候故其邊の處より
起候内情ニ被察申候就るも廣澤氏兎角立歸り相成候而談合無之ハ又々
懸違ひ相成候而間違も到來いし候付早々上京有之候様別番を以懸合相
成申候色々之繰違實以遺憾千萬ニ御坐候貴下も一時御上京相成候も可
然候へとも人心ニ關係いしを場も可有之ト相考申候何分早々廣澤歸京相
成候様御取計可被下候此旨早々已上

十月九日

大久保一藏

吉井幸輔様

【解説】薩長藝三藩ノ聯盟成立スルヤ廣澤ハ八日夜京師ヲ發シ
歸藩ノ途ニ就キ大坂ニ至リシカ會々長藩ヨリ豫定ノ出兵方略
ヲ變更スルノ報ニ接ス是ヨリ先利通カ山口ニ使スルヤ薩兵ハ
上京ノ際三田尻ニ入津シ長藩二藩ノ兵ト共ニ上京スヘシト約
セシカ其後藩内ニ支障起リテ薩兵ノ出發遅延セシヲ以テ長藩
ニ於テハ時機ヲ失センコトヲ憂へ暫時大決策ヲ延引スルニ決
シ福田・狭平・上京シテ之ヲ利通等ニ報ス利通等ハ大ニ之ヲ遺憾
トシ乃チ再ヒ廣澤ノ上京ヲ促シ小松・西郷・福田・品川等ト相會シ
之レカ善後ニツキ協議スル所アリタルナリ本書ニ對シ吉井ハ
大坂ヨリ次ノ答書ヲ贈レリ

【参考】吉井幸輔より大久保への書翰慶應三年十月十日

（大久保家藏）

尙々村田ニ亦も三田尻迄被差遣候方丈夫ニ可宜御國出兵之人數
若猶豫いふし候ハ不相濟念之爲左様いふし候方可宜候

貴翰拜見色々繰違相成扱々残念千萬御座候其御許ニハ十分之御手筈相成居候由御國許如何之次第相運候歟色々六ヶ敷事共ハ案中と相察候併斯迄御決定之事ニ御座候付一手之人數被差出候處ハ萬々相違有之間敷とハ乍存類ニ懸念罷在事ニ御座候昨日津和野も二小隊上坂爰元之様子相分不申進退究し居申候由隊長の面會大概ハ申聞置候含御座候今朝船組參り土州之人數も相見得候由ニ相咄候是ハ未儘ニハ無之候得共多分其通共ニハ有之間敷や右次第ニ付御國人數遅引ニ付ハ大ニ心をき申事御座候廣澤氏ニも今晚中滯坂明日迄藝船漸ク引留置候處今朝飛脚到着相應不平之体ニ相見得候得共抑亦上京之筋相決唯今出船相成申候委細之儀ハ自ら當人ハ御聞取可被成候付相省キ候

一金子入用之節ハ相渡候様御家老衆ハ一筆御問合御留守居ハ御遣被下候得共大ニ仕合ニ御坐候手形所之仕向茂有之由無左候亦も随分相濟

申候得共都合宜御坐候付御頼申上候 以上

十月十日

吉井幸輔

大久保一藏様

一三五 西郷吉之助への書翰 慶應三年十月十一日

【按】廣澤着京セシニツキ會合ノコトヲ打合セタルモノナリ

西郷吉之助様

大久保一藏

御安康奉拜賀候扱廣澤昨夜半到着ニ候間今朝早御仕舞此方へ御入來被下候様御願申上候此旨早々得御意候以上

十月十一日

追亦大夫方へも申上置候

【解説】利通ハ十一日早朝小松西郷等ト協議スルトコロアリシ

カ共ニ歸藩シテ忠義公ヲ奉シ大舉上京スルニ決シ之ヲ廣澤ニ告ケ又村田新八ヲ三田尻ニ遣リ薩兵ヲ暫時同港ニ滞留セシメタリ追書ノ大夫ハ小松ヲ云フ

一三六 西郷吉之助への書翰 慶應三年十月十二日

(大久保利武藏)

【按】三島通庸着京ニツキ會合ノコトヲ打合セタルモノナリ

御安康奉賀候別紙昨夜到來候由只今帶刀殿御持參ニ御座候吉井方ハ何ハ一封も無之定御方様へも參不申歟ト奉存候三島彌兵衛上京之由候付何々着之上形行承候上からてハ何も手ヲ下シがハ事ト相考申候若三島着ニ候ハ、速ニ聞取不申ハ不相濟候付直様御殿之方へ罷出候事ニハ有御坐まゝ々々御面働伊地知邊に御引合被下候様奉願候帶刀殿も此方へ御出ニ付一應御入來被下候得ハ仕合御座候直様出殿ニハ旁差支可申ト相考候付此旨早々(以下缺)

十月十二日

大久保一藏

吉之助様

別紙添

【解説】曩ニ利通カ大山綱良ト山口ニ使スルヤ長藩トノ協約ニ依リ綱良ハ同所ヨリ歸藩シテ直ニ藩兵ヲ率キ海路先ツ三田尻ニ寄港シテ長藝二藩兵ト合シ東上ノ計畫ナリシカ當時鹿兒島ニ於テハ王政復古決舉ニ反對スル俗論黨アリテ復古黨ト軋轢シ藩内ノ實情ハ利通等ノ計畫通り直ニ出兵スルコト困難ノ状態ニアリ綱良モ亦如何トモスル能ハス遂ニ出兵遅延シテ是ノ月三日ニ至リ漸ク兵二隊ヲ率キテ鹿兒島ヲ發シ六日三田尻ニ着セシカ長藩ニ於テハ既ニ方略變更後ナリシヲ以テ同行ノ通庸ヲシテ東上形行ヲ利通等ニ報セシメタルナリ文中ニ所謂別紙ハ之ヲ逸ス伊地知ハ正治ヲ云フ

一三七 討幕の密勅請書 慶應三年十月十四日

(岩倉公舊蹟保存會藏)

【按】討幕ノ密勅ヲ薩長兩藩ニ賜ヒシヲ以テ兩藩士連名ヲ以テ
請書ヲ上リタルナリ

當節不容易 御危急之砌爲

皇國不被爲顧忌諱 御内々

御盡力確立不拔之

叡慮被爲伺取

勅書降下兩藩深

御依頼被爲

思召候 御旨趣奉謹承卑賤之小臣等不奉堪感激流涕奉存候早々歸國寡君
共へ報知兼之決定之宿志益以貫徹仕抛國家堂々大舉仕可奉安
宸襟候此段盟天地御受仕候謹言

慶應三年丁卯

十月

廣澤兵助 眞臣(花押)
福田俠平 公明(花押)
品川彌二郎 日致(花押)
小松帶刀 清廉(花押)
西郷吉之助 武雄(花押)
大久保一藏 利通(花押)

中山前大納言様

正親町三條前大納言様

中御門中納言様

岩倉入道様

【解説】利通等カ義ニ討幕ノ宣旨ヲ請フヤ岩倉卿ハ大ニ盡力ス
ル所アリシカ聖上ニハ之ヲ嘉納アラセラレ十三日ヲ以テ愈勅

書ヲ降下セラル、ニ内決シタリ所謂討幕ノ密勅是ナリ是日岩倉卿ハ利通及ヒ廣澤ヲ招致シ子息具綱孫具定ヲシテ毛利父子ノ官位復舊及ヒ薩長二藩主ニ上京ノ朝命ヲ傳ヘ翌十四日ニ至リ正親町三條實愛ハ利通ト廣澤ヲ其邸ニ召シ勅書(薩藩ニ對シテハ十三日付)及ヒ錦旗(目錄)ヲ附與セラル利通等乃チ長藩士等ト連署シテ此請書ヲ上リタルナリ尙ホ此請書ハ利通ノ執筆ニ成リ現ニ京都岩倉公舊蹟保存會ニ之ヲ藏セリ而シテ討幕ノ密勅ト共ニ會桑兩藩主誅戮ノ密勅モ亦降下セシカ孰レモ玉松操ノ起案ニ係リ薩藩ヘノモノハ正親町三條實愛卿・長藩ヘノモノハ中御門經之卿之ヲ書セリ

【參考】其一 薩藩へ賜はりたる討幕の詔書慶應三年十月十三日

(公爵島津忠承君藏)

左近衛權中將源久光
左近衛權少將源忠義

詔源慶喜籍累世之威特閭族之強妄賊害忠良數棄絕 王命遂矯 先帝詔而不懼擠萬民於溝壑而不顧罪惡所至 神州將傾覆焉 朕今爲民之父母是賊而不討何以上謝 先帝之靈下報萬民之深讐哉是 朕深憂憤所在諒闇而不顧者萬不得已也汝宜體 朕之心殄戮賊臣慶喜以速 奏回天之偉勳而措生靈于山嶽之安此 朕之願無敢或懈

慶應三年十月十三日

正二位藤原忠能

正二位藤原實愛 奉

權中納言藤原經之

【參考】其二 薩藩へ賜はりたる會桑二藩討伐の御沙汰書慶應三年十月十三日(公爵島津忠承君藏)

會津宰相

桑名中將

右二人久滞在輦下助幕府之暴其罪不輕候依之速可加誅戮旨被 仰下候事

十月十三日

忠能
實愛
經之

薩摩 中將殿
同 少將殿

【參考】其三 侯爵嵯峨實愛談話筆記明治二十四年 (維新内外事情質問録所載)

○明治廿四年六月嵯峨侯爵ニ岡谷繁實カ維新當時ノ實歴ヲ質問シ之ヲ筆記セ
ルモノアリ名ケテ維新内外事情質問録ト云フ茲ニ掲クルハ其一節ナリ

質問録第一條

問 討幕ノ勅書ヲ薩長ニ賜ハリシハ如何ナル次第ニ候哉

答 余ト中御門トノ取計ナリ

第二條

問 中山公ノ御名モアリ是ハ如何ナル次第ニ候哉

答 中山故一位ハ名計リノ加名ナリ岩倉カ骨折ナリ

問 勅書ト稱スルモノ繪旨トノ違ハ如何ニ候哉
答 薩長ニ賜ハリシハ繪旨ト云フヘシ

第三條

問 繪旨ノ文案ハ何人ノ筆ニ係リシヤ

答 玉松操ト云フモノ、文章ナリ玉松ハ至テ奇人ニテアリシ

第四條

問 筆者ハ何人ニ候哉

答 薩州ニ賜ハリシハ余之ヲ書ス長州ニ賜ハリシハ中御門之ヲ書セ

リ

第五條

問 右ハ二條攝政又ハ親王方ニモ御協議アリシコニヤ

答 右ハ二條ニモ親王方ニモ少シモ洩サス極内ノコニテ自分等三人

ト岩倉ヨリ外知ルモノナシ

第六條

問 右書ヲ何人ニ渡シニ相成リシヤ

答 余ハ大久保ニ渡セリ中御門ハ品川カ廣澤ニ渡シタリ

第七條

問 岩倉公ハ勅勘ノ人ナリ御相談ノ事ハ如何ニ哉

答 余ト岩倉トノ中ハ多クハ大久保吉井内田ノ三人取次キシナリ岩倉ニ一人ノ家來アレモ實ニ機密ノコト故手紙ニテ往復ノ節ハ符牒ニテ認メ候コトナリ萬一途中ニテ奪ハレテモ分ラヌ様ニセリ

第八條

問 勅書御渡シハ實ニ危険ナルコトニテアリシ斷然ノ御處置ハ實ニ今日維新ノ基トナリタリ

答 勅書ヲ渡ス節ハ實ニ心配セリ中御門トモ此事漏洩セハ頭ヲ切ラルヘシト云テ咄シ居リシコナリ余カ大久保ニ渡セシ時ハ幕府ノ近

藤勇カ七八人召連レ余カ門前ニ待居タリヨリテ大久保ニ其事ヲ咄シ如何スヘキト言ケレハ大久保曰ク何モ恐ロシキコトハナシト云テ出テシカ實ニ心配セリ夫ヨリ大坂ニ持降リシ此ハ幕ニテモ疑ヲ起シ會津ノ佐々木某カ跡ヲ追ヒ大坂迄下リシカ小松帶刀其書ヲ懷ロニシテ乗船セシ後ナリ實ニ浮雲ナキコトニテアリシ又曰勅書ヲ賜ハラテハ方向ノ決シ様ナキト言フ申出故賜ハリタルコナリ右ノ勅書ニテ薩長二藩トモ方向ハ決シタルナリ

一三八 植田乙次郎への書翰 慶應三年十月十五日

【按】藝藩ノ汽船着坂ノ實否ヲ問合セタルモノナリ

爾后尙御安祥被成御坐奉拜賀候然モ尊藩蒸艦着坂相成候ヤニ承申候彌參申候哉午略義鳥渡以書中御尋申上候拜具

十月十五日

大久保 一藏

植田乙次郎様

侍史

【解説】密勅降下ニ付キ利通等ハ愈藩主ヲ奉シ大舉上京ノ爲メ歸藩ヲ急キ便船ヲ求メツ、アリシカ偶マ藝藩萬年丸着坂ヲ聞キ其實否ヲ問合セタルナリ而シテ其結果利通ハ十九日小松西郷等ト萬年丸ニ塔乗大坂ヲ出帆歸藩ノ途ニ就キタルナリ

一三九

伊地知壯之丞への書翰

慶應三年十月廿三日（河原田稼吉氏藏）

【按】在長崎ノ伊地知へ軍艦購入ノコトニツキ依頼シタルナリ岩下君ハ一封奉呈候得共尙亦奉拜啓候彌以御安康不相變御奔走之段奉大慶候隨而僕碌々不圖歸國仕候上國模様意外之變態罷成委曲ハ野村氏ハ御聞取可被下与相省キ候今般之處ハ是非君上 御出馬不被爲 在候而之不相濟機會御坐候付而ハ軍艦御取入之事

別而急務ニ候間野村ハ申合致置候承候へハ右一條先生於御國元御確斷相成居候趣相聞實ニ雀躍此事奉存候最早此節限ニ而兩端相決候場合は迄中將公 御趣意立不立之御大事故假令如何様御國元ニ而異論有之候而も微軀之限ハ盡力之決心御座候付是非來月三日限ニハ御乘込被下候様御盡力萬禱千祈仕候此形勢畢竟之處ハ於先生ハ必御見据相付居候事ト贅言不仕候右御願迄勿々書餘何も面上与申殘候艸々頓首

十月廿三日

一藏

壯之丞様

侍史

【解説】將軍徳川慶喜政權奉還ノ書ヲ上リシヲ以テ朝廷ニ於テハ慶喜ノ奏聞ヲ容レ諸藩主ニ上京ヲ令セラル是ニ於テ利通等ハ曩ニ賜ハリタル密勅ヲ奉シテ歸藩シ藩主ノ東上ヲ決セントシ小松西郷及ヒ長藩ノ廣澤福田等ト共ニ十七日京師ヲ發シ大

坂ヨリ藝船萬年丸ニ乗リ二十一日三田尻ニ寄港ス會マ利通ハ風邪ノ氣味アリシヲ以テ旅亭ニ留マリ小松西郷ハ山口ニ往キ毛利敬親公父子ニ謁ス本書ハ三田尻ヨリ長崎出張中ノ伊地知ニ贈リシモノナリ當時薩藩ニハ汽船數艘アルノミニテ一ノ軍艦モナカリシカハ利通等ハ大ニ之ヲ遺憾トシ先ツ軍艦購入ノコトヲ伊地知ニ依頼スル所アリタルナリ野村ハ盛秀當時長崎ニ在勤セリ書中御國元ニ亦御異論云々ハ藩内ニモ維新ノ決舉ニ反對論少ナカラサリシヲ云フ利通等ハ歸藩後大ニ大義名分ヲ説キ俗論黨ヲ制シ遂ニ忠義公ハ十一月十三日ヲ以テ新タニ長崎ヨリ購入セル軍艦春日丸ニ塔乘上京ノ途ニ就クコト、ナリ利通ハ其先發トシテ十日鹿兒島ヲ出帆高知ニ寄港シ容堂公ノ上京ヲ促シ十五日入京シタルナリ

一四〇 岩倉公に呈せし覺書 慶應三年十月

(岩倉家文書)

【按】王政復古ニ付キ長藩并ニ五卿赦免及ヒ外國へ布告ノコト等ヲ陳へタルナリ

一長州

御沙汰相成候上三條實美公以下同時朝命可被爲 在御相當奉存候事

一久世卿御一列被免幽閉候條同斷

一各國公使の御布告之事

但 被命追討候上公然明白之御趣意大畧ヲ著ハシ是迄條約面ニおゐて聊

朝廷御異條不被爲 在候付尙改而從

朝廷被及談判候間來ル十一月兵庫港に廻船いさし候様

【解説】本書ハ討幕ノ密勅降下以後ノモノナリ愈慶喜追討ノ際ニハ先ツ長藩ト五卿ノ赦免ヲ行ハセラレ且ツ朝廷ヨリ諸外國

ニ對シ討幕ノ趣旨并ニ既定ノ條約ハ之ヲ遵守スルコトヲ通告スヘキヲ具陳シタルナリ

一四一 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十六日

(岩倉家文書)

【按】岩倉公ヨリ參邸ヲ求メラレシニ對シ答書シタルナリ

御直書難有奉拜見候然々坂本中岡異變之儀ニ付早々御示諭被爲下實不堪遺憾次第奉存候何も後刻參殿之上萬端可奉窺其内御請迄早々如斯御坐候宜敷御披露被成下候様奉願候已上

十一月十六日

大久保一藏

岩倉老公

近侍中様

【解説】利通ハ十五日入京シタルカ同日坂本中岡ノ兇變アリ而

シテ岩倉公ヨリ急ニ面談ヲ求メラレタルハ曩ニ將軍徳川慶喜ヨリ大政奉還ノ上表アリ利通等歸藩後會桑土三藩慶喜ノ爲ニ奔走シ討幕ノ實行困難トナリタルヲ以テ其ノ事情ヲ告ケ之レカ對策ニ付キ利通ノ意見ヲ徴セラレタルナリ

一四二 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十七日

(岩倉家文書)

【按】岩倉公ヨリノ來書ニ答ヘ且ツ賜品ニ對シ謝シタルナリ

御直書被爲成下難有奉拜見候新撰組云々ニ一條態与尊諭被仰付委曲拜承仕候且亦過刻々珍舖御品拜領被仰付難有奉存候今朝ハ兩卿ハ參殿遂言上置申候右御受御禮迄早々如此御坐候宜舖御執成被下候様奉願候拜首

十一月十七日

大久保一藏

北岡様

執事中様

【解説】本書中「新撰組云々」一條「トアルハ時局ノ切迫ニ隨ヒ新撰組ノ徒横行スルヲ以テ公ヨリ警戒ヲ注意セラレタルナリ」兩卿ハ中山正親町三條二卿ヲ云フ利通ハ是ノ日兩卿ニ謁シ慶喜眞ニ反正ノ實ヲ表セサル限リ討幕ノ勅旨ハ變スヘカラサルコトヲ具陳シタルナリ

一四三 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十八日

（岩倉家文書）

【按】公ノ來書ニ答ヘ且ツ中岡慎太郎ノ死ヲ悼ミタルナリ

尙々今日迄尾ハ是非面會ハムレ度与之事ニ而晝カ出會仕筈ニ御坐候今朝迄御直書拜領被仰付難有拜見仕候今晚云々一條何も差支無御坐候付以都合從此方御案内可奉申上候石川もあくなり候由實ニ以可慨可惜事ニ奉存候此段御受答奉申上候勿々宜舖御執成置可被下候已上

十一月十八日

大久保一藏

岩倉老公

近侍中様

【解説】今晚云々ハ岩倉公ヨリ利通ニ面會ヲ申入レラレタルニ對シ差支ナキ旨ヲ答ヘタルナリ石川ハ中岡慎太郎ヲ云フ十五日刺客ノ爲メ重傷ヲ負ヒタルカ遂ニ死シタルナリ尙々晝尾ハ名古屋藩ノ重臣ヲ指スコノ際岩倉公ハ利通ヲシテ尾越兩侯ノ朝幕間周旋ノ運動ヲ阻止セシメントセシカ利通ハ尾藩ヨリ會見ノ申込アリシヲ幸ヒ其要求ニ應シタルナリ

一四四 岩倉公への書翰 慶應三年十一月十九日

（岩倉家文書）

【按】岩倉公ヨリノ來翰ニ答ヘタルモノナリ

唯今歸宿仕御書奉拜見候夜前ハ御入被爲下難有奉存候一長家老末家召之處被止候儀實否奉伺置候處正三卿より云々之義爲御知

被下候由奉拜承候此條誠ニ無存掛事ニ而大ニ手順齟齬仕候事ニ御坐候
一正三卿短筒之儀委細奉長候當時第一之御方様必要之御品御坐候間片時
も無クテハ不叶事ト奉存候ニ付私持合之品可差上從此方爲持上候可
然哉御都合も可有之ニ付一應奉伺候

一坂本首メ暴殺之事彌新撰ニ無相違向被聞申候近日來益暴ヲ働候由第一
近藤勇カ所爲ト被察申候實ニ自滅ヲ招之表カト被存申候
右御受奉申上度早々如此御坐候以御序可然御披露奉願候以上

十一月十九日

大久保一藏

老 公

執事申様

【解説】利通ハ忠義公カ彌是ノ月十三日發途ニ決セシヨリ先發
シテ土藩ニ使シ十五日着京セリ然ルニ恰モ是ノ日坂本龍馬中
岡慎太郎ノ二人ハ幕府黨ノ爲メニ京都河原町ノ旅寓ニ於テ暗

殺セラレタリ利通ハ其新撰組ノ所爲ナルヲ聞知シ彼等カ暴行
ヲ以テ幕府自滅ノ兆ナリトシタルナリ當時幕府黨ハ大ニ復古
派ノ舉動ヲ注視シ曩ニ利通等カ京都ヨリ歸藩ノ際モ新撰組ノ
浪士等ハ之ヲ大坂ニ追躡シタリ故ニ利通等ハ上京スルヤ身邊
ヲ警戒スルノ必要ヲ感シ護身ノ爲メ常ニ短銃ヲ用意シ且ツ岩
倉公ニモコレヲ贈リ切ニ警戒セラレンコトヲ進言セシカ公ハ
大ニ其厚意ヲ謝シ其ノ使用方ノ説明ヲ乞ヘリ而シテ此ノ書ニ
依レハ岩倉公ハ同志ノ正親町三條實愛卿ニモコレヲ携帶セシ
メンコトヲ以テセシモノ、如シ故ニ利通ハ直ニ自己ノ分ヲ正
三卿ニ贈リタルナリ書中ノ近藤勇ハカノ有名ナル新撰組隊長
ナリ岩倉公ハ此書ニ答ヘテ短筒ハ直ニ正親町三條卿ニ贈ラレ
タキ旨ヲ以テシタリ

【参考】其一 岩倉公より大久保への書翰慶應三年十一月十九日 (大久保家藏)

一見候秘冊正令入手候

正卿短筒之事速ニ承知嘸々喜悅と存候足下直ニ御廻し頼度候坂(坂本龍馬)横死云々臣も實ニ遺憾切齒之至り何卒眞先ニ復讐致し度ものニ候

即時

北岡正治(岩倉公)

大久保様

【参考】其二岩倉公より大久保への書翰慶應三年十月十六日

(大久保家藏)

昨夜は御苦勞(中略)一件更に申入候通り左印(近衛忠房)に發露分明之上ハ(密勅近衛ニ洩レタルヲ云フ)無是非候得共姓名亦文意巨細は吐露有間敷と被察候間小氏(小松帶刀)より村士(村松松根)御都合ニ亦聞誤り位之處ニ出來候ハ、三卿(中山・正親町三條中御門)之處ハ如何様ニモ安心被成候様可相成と存候將今朝は不存寄兩士ノ奇品(短筒)外ニ二種(金品)目錄之通り惠贈扱忝存候受納も不本意候得共當今急務之品柄忝申受候萬謝

萬謝廣士(廣澤)えもよろしく傳聲頼存候早々不備

十月十六日

北岡正治

大久保様

内啓

尙々後刻來會とは存候得共御品取扱(短筒使用ノ法)心得之人一日北山

(岩倉村)へ御苦勞頼度存候事ニ候也

一四五 岩倉公への書翰 慶應三年十一月廿一日

(岩倉家文書)

【按】忠義公着京ノ期日ヲ通報シタルモノナリ

御前益御機嫌克被遊御座恐悅奉存候然ニ寡君にも昨廿日着坂明後廿三日京着仕候筈御座候間以御序達 御聽候様御取計被下度奉願候以上

十一月廿一日

大久保一藏

岩倉老公

執事御中様

【解説】忠義公ハ豫定ノ如ク十三日西郷等及ヒ兵二大隊ヲ率キテ鹿兒島ヲ發シ十八日三田尻ニ着スルヤ長藩世子毛利元徳ト會見シ西郷モ亦同藩ノ重臣等ト薩長藝三藩兵ノ進退部署ヲ左ノ如ク決定シ即夜三田尻ヲ發シ翌日大坂ニ着シタルナリ

- 一 三藩共浪華根據之事
- 一 根據守衛薩藩二小隊へ長藝之内相加候事
- 一 薩侯御一手は京師を專任とす
- 一 長藝之内一藩京師を應援す
- 一 薩侯御着坂廿一日ニ而廿三日御入京廿五日三田尻出浮候兵出帆廿八日西の宮着薩藩より京師の模様報知之上進入の筈

一四六 岩倉公への書翰 慶應三年十一月廿四日

(大久保利武藏)

【按】會見ノコトニ付キ問合セタルモノナリ

今晚御出會奉申上候付而ハ參 殿仕候而可然や別而奉恐入候得共弊宿方へ

御入被爲成下候哉何分御伺之上爲御知被下候様奉願候以上

十一月廿四日 大久保一藏

北岡様

近侍中様

追而

御入被爲下候ハ、夜入候得而御都合次第何も差支無御坐候

【解説】利通ハ當時屢々岩倉公ト密會シ王政復古ノ決舉ニツキ謀議セシカ幕府黨ハ毫モ之ヲ覺ラサリキ此夕モ岩倉公ハ王政復古大變革之次第書草稿ヲ携へ來リ深更マテ談合スルトコロ

アリタリ宛名ノ北岡ハ岩倉公ノ變名ナリ書中ノ弊宿ハ京都石藥師ノ寓居ニシテ庭先ノ茶室ヲ常ニ密會ニ用ヒタリト云フ此石藥師ノ宅ハ維新當時岩倉西郷木戸廣澤品川等カ常ニ出入セル緣故深キ舊蹟ニシテ戊辰正月三日征討大將軍仁和寺宮ニ初テ賜ハリシ錦旗ハ此宅ニ於テ其調製方ヲ密議セシナリ品川彌二郎傳ニ左ノ一節アリ

慶應三年十月六日ノ事ナリシ利通ハ品川彌二郎ヲ伴ナヒ洛北岩倉村ニ蟄居セル岩倉公ヲ訪ヒタルニ岩倉公ハ喜ヒ迎ヘ國事ニ關シ謀議時ヲ移シ薩長軍討幕ノ順序ニ及ヒ愈王政維新ノ曉發表サルヘキ玉松操ノ起草セシ勅書ヲ始メ新政府ノ組織人選等協議ヲ盡サレ猶特ニ玉松ノ考案ニ成レル錦旗調製ノコトヲ依頼セラレタリ利通ハ石藥師ノ宅ニ歸リ直ニ家人用帶地等注文トシテ大和錦二反并ニ紅白緞子數卷ヲ西陣

ヨリ取寄セ品川等ト密議ヲ凝ラシ愈長州ニ於テ之ヲ調製セシムルコトニ定メ品川ハ自身之ヲ携帶シテ歸國シ山口軍隊會議所ニ藏メ置キ錦旗各二旒日月章入軍旗各二十旒ヲ調製シ各半數ニ分チ半數ハ京都薩邸内ニ密藏シ他ハ之ヲ山口ニ留メ置キタリ山口ニ於テハ玉松ノ考案ト大江匡房ノ皇旗考トヲ折衷シテ調製シタルモノニシテ戊辰ノ破裂薩長兩軍進發マテハ何人モ之ヲ知ルモノナカリシト云ヘリ

又後年品川子爵カ岩倉家ノ舊臣山本復一ニ贈リシ錦旗ニ關セル書翰アリ

兩度ニ尊書拜讀御返却書類正ニ落手仕候岡吉春(萩ノ有職師・岡市之助ノ父)ノ錦旗考并玉松ニ碑文御贈被下奉萬謝候錦旗考中ニ右府公ニ事ヲ記セサリシハ遺憾ナリ(尤山口ニテ秘密中ノ秘密ニテ製作サセ候故本人ハ京都ニテ云々ノ事ハ語り不

申サリシ製造場所ハ山口ノ後^シ河原町諸隊會議所奇兵隊其
 外各隊ヨリ常置委員ノ詰所ニテアリシノ土藏ノ二階ナリ錦
 ノ地ハ大久保殿ノ別宅京都寺町白梅小路ニヤジ(品川子爵)カ
 潜伏中ニテヤジカ山口ニ持歸リ二ツ日月ニテ四本製造ノ中
 毛利家へ引當トシテ一ハ山口ニ殘シ置一ハ薩邸相國寺中林
 光院へ九日(慶應三年十二月九日)ノ朝迄ヤジカ潜メ置タリ御參
 考迄ニ申上置候(下略)

一四七 岩倉公への書翰 慶應三年十一月二十七日

(愛甲兼達氏藏)

【按】公ノ書ニ答へ猶ホ中御門正親町三條兩卿へ會談ヲ乞ヒタルモノナリ

尙若今晚御調不被爲候ハ、明晩ハ是非々々奉願候明朝中卿へ參殿仕
 候ハ、御模様も可相分候付歸懸何分奉申上候様可仕候尤明朝參殿之

事推參ニ可然ヤ乍恐烏渡御前通被下候様御座候へハ別ニ難有奉存
 候

御書拜見仕候然々明朝中卿に參殿之義委曲奉承知候今朝正卿に參殿奉言
 上候處何も御異論無御座候今朝中卿も早々之御事ニ細事於宮中御示談
 可被爲在御晰合ニ候尙亦篤与御參之上御談合御決定可被遊与之御事ニ
 御坐候就るハ

御前今晚

御出被爲在候義ハ是非私よりも奉願度奉存候間何卒御確定ニ相成候様萬
 々御盡力之程奉伏冀候今朝之處御異論ハ無御座候得共幾重ニも打込メ不
 申候亦乍恐十分之處ニ由り兼可申奉懸念候此段御受答奉申上候御宜鋪
 御披露奉願候已上

十一月廿七日

大久保一藏

北岡老公

執事中様

【解説】當時岩倉公等ノ間ニ計畫セラレシ大變革ノ斷行ニ就テハ主謀者タル中御門正親町三條卿等幕府黨ヲ顧慮シ稍躊躇ノ色アリ依リテ利通ハ大ニ之ヲ遺憾トシ岩倉公ト議シ兩卿ヲ激勵シ其決心ヲ強固ニセシメントシタルモノナリ書中ノ中卿ハ中御門正卿ハ正親町三條卿ヲ云フ岩倉公ハ本書ニ對シ又左ノ返書ヲ送レリ

【參考】岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十一月廿八日

實ニ餘日も無之候事ケ様重大之義今日ニ決定なく主謀二三人之公卿ウロク々々ニ亦不相濟義十分御談し可給候也

昨報懇書正に一見正卿云々承候得とも尙今日中卿口氣御承知ニ断然決議之事ニ候ハ、出頭にも不及事ニ付乍御苦勞今朝歸路入來頼存候

中卿は御出向ニ候ハ、先御主人上京後御使而して大事始終執行之邊よほと断然御決定無之亦も萬不行逆御申入之事内々御頼申入候事ニ候

同卿頼之小筒二今日も一挺ニ亦も御持參可給候様色々之義申頼汗顔之至リニ候得とも能々御含可給候

中卿は今朝御出頭之事只今申遣し候返事到來之上さし支へ等も候ハハ早々可申入候右早々如此候也

廿八日

北岡

大久保殿

一四八 岩倉公に呈せし覺書 慶應三年十二月五日

(岩倉家文書)

【按】王政復古ノ大號令煥發ノ際ニ於ケル重要事項ヲ具陳シタルナリ

十二月五日

- 一 帥宮 仁和寺宮 山階宮密告御引受可申上候事
- 一 四藩 召之御書附前夜御渡云々之儀可然藝ハ當朝之方
- 一 會桑御達

御沙汰之品も被爲 在候間早々歸國可奉待命云々ニ可然也

但蛤御門等固場所被免人數早々可引取

- 一 二條家 賀陽宮以下兩役國事掛御達之儀攝關兩役國事掛被廢候付不
- 被免役儀与之御文言ニハ及間舖哉

一 召諸藩參 朝之日兵士戎服之儘九門内ハ勿論御内參入被免候事

右評議之形行不憚恐奉申上候中山卿之方先宜敷方ニハ御坐候得共色々六ヶ敷中御門卿御一同之事も御見合与之事御坐候間左様御通被下候様奉願候迎も私誘引三條も御許容被爲在候處無覺束奉存候付只今右正三卿ハ參殿尙亦可奉申上置ト奉存候委曲去歸懸參殿可奉申候付

其内右之趣御披露奉願候以上

十二月五日

大久保一藏

北岡様

執事中様

【解説】本書ハ小御所會議ノ準備ニ付キ岩倉公ヨリ意見ヲ求メラレシニヨリ西郷岩下吉井等ト協議ノ上答申シタル要項ニシテ帥宮ハ有栖川熾仁親王仁和寺宮ハ後ノ小松宮嘉彰親王山階宮ハ晃親王ニテ三殿下カ小御所會議台臨ニ付キ諒解ヲ得ル爲メ豫シメ其ノ順序計畫言上ノコトヲ利通等カ擔任セシナリ四藩ハ尾越薩土ニシテ藝藩ノ召命ヲ特ニ當朝トナシタルハ以テ其深意ノ存スルヲ知ルヘシ

一四九 蓑田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月五日

(島津家文書)

【按】大垣肥後藩等ノ形勢及ヒ大號令煥發ノ期日竝ニ手順等ヲ
京都ヨリ藩廳へ報シタルモノナリ

中將様益御機嫌克被爲遊御座追日御順快被爲成候筈与奉大慶候於御當地
太守様益御機嫌克被爲遊御座御同慶奉存候爾後何も相變候儀無御座候三
邦丸ハ飛脚被差立候付其節形勢申上置候處其後追々穩之模様ニ罷成申候
新撰組之暴舉も其後ハ何事も無之近藤勇も幕之方ヨリ手も相付候由當分
之何方ニカ潜伏候哉ニ聞得申候

一紀州三浦休太郎藤堂深井等よと幕權復古之論相立專巨魁ト相見得候
處頃日ニ以ヨリ説ヲ立替候由ニ御座候大垣井田五藏与申者同斷之向ニ
被聞候處是以相反し候由ニ當今ニいヨリ候而モ專獨立之姿与相見得
下之處中々居合不申過半ハ進而倒ル外無之与之論ニ決居候由要路も一
定ナラス内々奔走もいヨリ候由ニ御座候君侯ハ實ニ反正亦らる而モ
此上被成様も無之ト別而御心配之由ニ候得共紗御ニ御困り此上モ歸國

之

朝命ニ而も有之候得モ御幸与之御趣意ニ被聞尾老公ハ其内實御書通等
も被爲在候山ニ承申候誠ニ頑愚固陋不臣之極ニ御座候熊藩も津田山三
郎留守居ハ出先日モ西郷方ハ參是迄之處ヲ慨歎し御國ハ依頼与之嘶ニ
亦全ク論も變り淺井新九郎ナル者此内歸國之由ニ御座候假令十分之勤
王ハ出來さるとも尊幕ハ止め候向ニ御座候其後何方も上京無御座候
一御盡力之御手順も 容堂公御上京無之故未拱手して被爲待候御都合御
坐候例之御遲寛ニ甚私共ニも心痛御事ニ御座候公卿之處ニ於ても無遺
算御大策被爲立五日迄之御期日相立

御發動之御決御坐候處後藤歎願之趣有之八日迄与御遷延被爲在候全躰
當月二日御上京ト申事ニ亦五日ニ御取究相成候得共八日ニ御上京ト相
成右通旁御延引相成申候此節之處ハ萬々無相違御上京ニモ相成申向ニ
亦人数等も凡亦上坂且御小姓邊も御先番等ハ盡く參居候由ニ御座候如

何様しても八日ハ相延不申御確定ニ御座候間十日迄發動無相違御納得可被下候此度ハ段々能機會ト相成是程之事を期日延ニ相成若敗ヲ取候不_レ最_レ早

皇國夫限ト可申譯御坐候間此上ニ遷延不相成候様盡力仕事ニ御坐候未漏洩之憂ハ無御座付其段ハ御安心可被下候後藤ハ密策打合申候處別不_レ同意ニ亦少も異存無之大幸ニ御坐候輕忽ニ談合も恐有之候付見合居候處頓与外ニ策之立様無之困究之處ハ持込候間大ニ大慶い_レし候事ニ御座候就_レる歎願之趣承り有志公卿ハ情實申上吳候_レ八日ニ御延引相成タル事ニ御座候

一御手順ハ攝關議傳國事掛ヲ被廢太政官ヲ設ケ三職被置總督參議人材御登庸賢侯有志公卿所謂衆議粹出議事院ノ法ニ倣_レる參與ノ職ニハ堂上地下之差別亦く陪臣草莽トいえとも人傑を以御拔擢相成候由即日其根本御治定然して命ヲ傳へらる_レ之御運ニ御座候慶喜公之處ニ五藩土藝尾越御國 召

之上尾越ニ命せら_レ十分反正謝罪之道ヲ御内諭有之官一_レ等ヲ降領地返上候列ニ下罪ヲ

閣下ニ奉待等將軍職辭表ハ既ニ過日差出相成無異議

朝廷御趣意通斷然訴出候得_レ去始_レ真ノ反正實行顯_レト可申候得_レ去其上ハ公平寛大之御處置被爲在御至當あるへしト之御事會桑ニ至_レ去于今周旋もい_レし反正之廉無之宗藩ニ對し_レ去無道ヲ助ルト申道理故守護職所司代ヲ被廢候付早々歸國 御沙汰奉待様 御達之賦長防御處置即日寛大ヲ以上京迄も被命候御賦各國御布告ハ不及申列藩御布告農工商諸人等ニ至ル迄夫々安堵相成候様御示諭等無殘處御内定被爲在候御發動之日ニい_レし候得_レ去於幕究_レ干戈を以テ動候義ハ萬々無御座今_レ會而已_レ之事ニ相成候得_レ去少々動キ候_レも差知タル事与愚考仕候乍去戰ハ期し不申候_レハ中々以右御大策被行候儀無覺東尤反命_レる者_レ直ニ御追討与_レ申

朝廷之御兵力ハ無御座候_レ去御威光相立候場ニい_レし兼申候當日

朝命ヲ以九門内御警衛ハ五藩に被 仰出候筋ニ御坐候後藤ニも彌決心
藝ニおひて其期ニ臨ミ兩藩を談し候得て子細無御座候

一長兵も西之宮に出張候處去ル二日晚被 仰渡趣も被爲 在候付致上坂

奉待 御沙汰候様從

朝廷 御沙汰相成別而安心仕候正議之勢よかと相立候る自然列藩も

朝威ニ服從仕候様之向ニ成立即今之處ニあて無此上都合ニ御座候併何

分大事之御場合

太守公ニも別而御配慮被遊從而私共ニ於る苦心仕候此上ハ從來勤

王無二之

御誠意貫徹仕候様萬々盡力可仕決る輕舉之事ハ無御坐付其段ハ御安心
可被下候

右大略ノ形行奉申上候以御賢慮達 御聽候儀可然奉願候以上

十二月五日

大久保 一藏

蓑田傳兵衛殿

追而今日ハ公卿方は後藤同道參 殿只今罷歸達方相成候る委曲認得
不申大綱之形行迄亂筆ヲ以申上候付宜舖(不明)候ハ、桂大夫小大夫は
右様次第ニも別段不申上付本文之形行宜舖御傳被下度乍自由奉願候
小大夫ニハ少々御快方ニ候ハ、御勉強ニも御上京相成候様御盡力被
成下度萬々奉願候十分無事相違候得て勿論事アレハ殊更跡之處大事
ニ御坐候付幾重ニも御盡力早々之處奉伏冀候以上

【解説】利通等ハ岩倉公ト謀リ中山忠能中御門經之正親町三條
實愛ノ諸卿ヲ説キ彌大革新斷行ノ議ヲ決シ五日ヲ以テ大號令
煥發ノ期トセリ然ルニ山内容堂ノ着京遅延セシヲ以テ同藩ノ
後藤象二郎ハ煥發ノ期ヲ八日ニ延引セラレンコトヲ要請シ遂
ニ八日ニ變更スルニ至リシナリ又長兵ヘノ御沙汰云々トアル
ハ是ヨリ先長兵カ西ノ宮ニ着スルヤ幕府ハ二條攝政尹宮等ニ

説キテ長兵ヲ退ケンコトヲ請ヒシモ中山中御門正親町三條卿等幕府ノ請ヲ斥ケ公然長兵ヲシテ大坂ニ至リ後命ヲ俟ツヘキ旨ヲ達セラレタルナリ

一五〇 岩倉公への書翰 慶應三年十二月七日

（岩倉家文書）

【按】大號令煥發ヲ尾越兩侯ニ内示ノ時機ニ關シ岩倉公ニ建言シタルモノナリ

尾越の御内諭急速との儀後藤言上之趣意尤には御座候へ共兎角今般御發動に就るも機密を肝要とし意外之御英斷人心戰栗仕候程ニ御威光擴充不仕候也

朝廷之御基礎確立仕候儀萬々無覺束奉存候然るに尾越を以御發表未然ニ幕中之周旋致さしめ候也ハ所謂帷幄中之秘籌密策を通し候同様且は如何之邊より攝政尹宮杯の漏洩等も難圖誠に御大事之御事と奉苦心候最早幕

を私疑致し候儀は固より於公論無之況乎尾越ニ於る寸毫不疑候得共皇國之御存亡ニ相係候成否之際ニ付ハ機事之密あるを以て主と致し候外無御座幕も澁澤其外之俗論あり尾も正論而已にも無之甚以可恐次第に御坐候古今事を發するに臨み敗亡を取候例不少既ヨ明日迄之處種々懸念仕候次第も有之實に不安寢食焦思痛心罷在候此段後藤之説を拒候道理ヨ相當如何ニ奉存候得共全左に無御坐不可止之至情奉申上候及直談候こと當然に御座候得共是は四卿之御決斷ニ被爲在候事ニ私共より御評議を動し候様ニ亦甚奉恐入候儀ニ付幸中卿も御出被爲在候ニ付御熟評御決議是非明日遅方尾越云々之御運相成候様山卿正卿は早々御封中を以被爲示候様萬々奉誠禱候全四卿御決議ニ亦
朝廷上之御都合邊明日遅方之方ニ御決被爲在候也於後藤其上可奉申上筋合無御坐候此旨至憂之餘奉言上候謹言

十二月七日

大久保一藏

上

【解説】是ヨリ先後藤象二郎ハ慶喜カ大政ヲ奉還シタル上ハ宜シク寛典ニ處シ朝議ニ參列セシメンコトヲ以テシ尙ホ九日ノ王政復古ノ決舉ヲ速ニ尾越兩侯ニモ内示スヘキヲ主張セリ利通ハ事若シ佐幕派ノ尹宮及ヒ二條關白ニ洩ル、トキハ必ス大事破ル、ノ恐レアリトシ發表マテハ機密ヲ守リ兩侯ヘノ内示モ成ル可ク遅キヲ得策トシテ四卿ノ決斷ヲ要請セシナリ幕ノ濫澤ハ誠一郎四卿ハ中山岩倉正親町三條中御門ヲ云フ當時利通ト後藤トハ時機切迫スルニ隨ヒ其意見衝突スルモノ多ク岩倉公ハ大ニ苦心シ遂ニ兩者ノ議ヲ折中シ愈八日ヲ以テ尾越ニ内諭スヘキニ決定シタリ本書ニ對シ岩倉公ノ返簡アリ

【參考】其一 岩倉公より大久保への書翰 慶應三年十二月七日 (大久保家藏)

請

對(岩倉公)

尙々明日午後ト申所ニ御所御用ニ可相成様ニと存候事ニ候永井下坂中ニ安安心之事も有之候程ニ事實ニ寸刻も大切之所ニ候之細書一見素より明日午後と申之の、中山へハ申入置候只今山卿正卿へも得と可申入心得之事ニ候後藤頻りに早急申參候得とも頗ル懸念之筋有之候所懇々細書符合幸此一書ニ添兩卿へ可申入候早々以上

十二七

【參考】其二 岩倉公より中山正親町三條兩卿への書翰 慶應三年十二月七日 (岩倉家文書)

今朝後大久同席ニテ彼尾越之件遅速示談各所見も相違し實に苦心候何分後藤は早々御沙汰相成候様頻りに申立おそくとも是非今晚と申居事に候然るに大久よりは別紙申出候御兩卿深く御賢考願上候餘程御大事と存候只々御所御用之筋に御申立ニ可明日巳とか午とかの邊折中ならんか而して又少しく御待せにて御延期に候へは八つ頃の御申渡しと相成り七つ頃の引取と申事に可相成と存候早々以上

十二月七日

實ニ兩藩要路之者雙方御鎮撫專要と存候今朝山卿御答畏入拜承今晚はよほと色々申上度候若正卿にも御同席候ハ、萬々都合之事と存候也

固 大 人(中山卿)

對 岳

成 大 人(正親町三條卿)

一五一 後藤象二郎への書翰 慶應三年十二月七日

(後藤伯爵家藏)

【按】後藤ヨリ容堂着坂ノ報ニ接シ答書シタルモノナリ

玉翰拜見尙御安祥被成御座奉拜賀候然ハ 容堂様御事昨晚御着坂今晚枚方御泊ニ亦御入京被爲在候段早々被示聞趣委曲承知仕候嘸御安心被成候半私共至御同慶奉存候早速修理大夫様にも申上候様可仕候此旨御禮答迄勿々拜首

十二月七日

大久保一藏

後藤象二郎様

拜答

【解説】此ノ書ニ依レハ容堂ハ六日大坂ニ着シ是日枚方ニ一泊八日入京ノ豫定ナリシカ如シ然ルニ後藤ハ容堂ノ入京遅延ヲ名トシ大號令煥發ノ期ヲ更ニ十日ニ延引センコトヲ要請セリ是ニ於テ利通等ハ大ニ之ヲ不可トシ八日ヲ主張ス岩倉公ハ中山卿ニ書ヲ贈リ延期ノ不可ヲ以テセシカ中山卿ハ九日ニ非レハ朝廷ノ準備整ハサルヲ答へ遂ニ九日ニ變更シタルナリ

【参考】其一 岩倉公より中山忠能卿への書翰 慶應三年十二月六日

先刻愚孫(具定)へ御沙汰之條謹承仕候實ニ小子にも苦心極りなく十方に暮れ候今夕刻より薩客へ出會候筈大久には大決斷何を申ても八ならては百事去り可申との事申出且又今日土にも後藤より折角申出候

邊も有之候へは是非々々八と申候大久は兼て九にてもと申上候由に候へ共西郷始め右にては決して不相叶兵勢にも關係候次第有之且會桑の様子も實に不容易との事にて困り入候旨ニ有之候亦外にも色々不容易咄しも承候事に候何分今晩拜顔萬々御相談申上度候マ、御用濟候ハ、如何に遅くとも參上篤与御咄し申上度候天明頃ニ相成ても宜敷小子は此に至候るは何事も顧慮不仕事に候大久か九にてもと申上候一言は軍法に背くとか兵氣に關るとか何とか申しやかましと申居り筆紙に不被盡條々も有之候若し是非とも九と申候事ニ候ハ、大に御相談申度候御返事申上候也

十二月六日

對岳

中山殿

【参考】其二岩倉具定より中山忠能卿への書翰慶應三年十二月六日
過刻々參殿御懇諭之趣祖父へ可申聞心得之處最早大久保寓宅へ行向

候に付如何可仕哉來家に承候へは大久保々西郷伊地知吉井等待居候由ニ亦寸刻も早く入來を待との事申來り即刻出門致候由に御座候私行向可申哉一寸相伺候也

十二月六日

具定

中山殿

【参考】其三中山忠能卿より岩倉具定への返翰慶應三年十二月六日
承候御書中にて先刻申入候通御達可給候何れにても九日ならては運ひ相付き不申候明朝正三と熟議明夜は岳公と熟談之積に候期日は九日と一決候其外に無致方候斯る重大之事件岳公御一身にて御決定有之候るは實以當惑に候前文の通一決の外は無之候以上

即時

固(中山卿)

【参考】其四岩倉公より大久保への書翰慶應三年十二月七日 (大久保家藏)
昨夜ハ長座種々申承り忝存候扱八九之事實ニ苦心候得共九ナラテハ

如何ニも不被行次第ニ至リ扱々遺憾千萬ニ候得共右不惡ノ御承引可給候兩卿ヲ被示聞候小子ニも實ニ殘心候得共右之仕合此上ハ九ニ決定之事ニ候御同志何レにも能々御傳可給候也

十二七

對

大久保殿

一五二 岩倉公への書翰 慶應三年十二月八日

(岩倉家文書)

【按】高崎井上兩人ニ宮方へ參向ヲ依頼シタルコト等ヲ報シタルナリ

高崎井上召呼篤与御趣意之程申聞候處無異儀領掌以必死盡力可仕大ニ當人共振たまし申候於 宮も萬々御異論被爲在ましくと申居候 仁門公も直ニ高崎行向申候別紙之通 帥宮御方之儀申參候間宜舖以御賢慮御取計奉願上候此段以紙面乍恐奉申上候可然御披露奉願候已上

十二月八日

大久保一藏

北岡様

執事中様

別紙

御手紙難有拜見仕候陳去鹽川義ハ栗津之變名与相見得申候此方ハ先刻相尋橋本与兩人ニお談合仕候處能受合候義ニ御坐候就る去
宮ニハ當分實ハ御喪中ニお表通之處御病氣と稱して御引入之事故平常之御召ニお去中々御參ハ出來兼候時機ニ御坐候由自然今日之處も矢張御參朝ハ御沙汰相成候由御坐候得共右等之仕合を以御斷相成居候ニ付明朝之處ハ斷然と右邊之處御打破之御達振さへ相變候へ去無相違御參被爲在候ニ付今一往正三卿ハ御周旋被下候何分栗津方迄申遣吳候様返々も申置候ニ付何卒貴兄より其邊之處深御汲取ニ相成候様入道様迄一筆御申遣被下候栗津迄合せ置申度御坐候ニ付宜敷御取計被下

度以參可申上筭御坐候得共乍略義（三字不明）御願申上候頓首

十二月八日

尙々御病氣之子細ハ無御厭參 朝被爲在様与歟何与歟少し相破候得
去御宜敷筋与被伺申候小細之事与相考候得共 朝廷向之處不相分候
故今一往御申込被下候處奉合掌候

西郷拜

大久保様

拜復

【解説】利通ハ岩倉公ニ約シタル如ク直ニ高崎佐太郎井上石見
兩人ヲ招キ仁和寺宮山階宮兩殿下へ參向ヲ依頼シタルコトヲ
報シ且ツ別紙西郷ヨリノ書翰ヲ添へ有栖川宮カ喪中ヲモ願ミ
ス奮起サルヘキ台旨ヲ岩倉公ニ傳へタルナリ

一五三 岩倉公への書翰 慶應三年十二月八日

（岩倉家文書）

【接】高崎佐太郎カ仁和寺宮へ參向ノ結果ヲ報告シタルナリ

只今高崎罷歸別紙之趣申參候間

御安心之爲早々差上候ニ付宜鋪御披露奉願候已上

八日

大久保一藏

北岡様

執事中様

別紙

唯今罷歸申候扱縷々及言上候處毫髪も御異論不被爲在極々御満足御奮
發委細御承知相成候間御安堵可被下候就御刻限之義如何相成候哉唯
今御所内罷通候處未諸卿御參中与相見得申候間山印にも出不申候一寸
此段奉得御意候何分御返事奉願候再拜

十二月八日

左京

一 藏 様

御親披

一五四 王政復古に關する建言書 慶應三年十二月八日 (下郷共濟會藏)

【按】岩倉公ニ提出セシモノニテ徳川氏ノ處置ニツキ中山・中御門・正親町三條卿等ノ決斷ヲ促シタルナリ

今般以

御英斷

王政復古之御基礎被召立度御發表ニ付而必一混亂ヲ生し候哉も難奉圖候得共二百有餘年之太平之舊習ニ汚染仕候人心ニ御座候得之動干戈候而返而天下之眼目を一新中原を被定候御盛舉与可相成候得之戰ヲ決候而死中活を得之

御着眼最急務与奉存候乍然戰之好而不可成事ハ大條理上ニ於而不可動者

ニ可有御坐候然るニ無事にして

朝廷上之御盡力貫徹大政官代三職之公論ヲ以大政を議せらる候日ニ至候而之戰より亦難与を乞く從古創業守成之難易議論難定俊傑之士ニおひて茂後世識者之評を免せ不申候況乎衰體之今日ニ而之詳考深慮

御初政之一令を御誤不相成候儀第一之御事ニ奉存候就而之徳川家御處置振之一重事大略之御内定奉伺候處尾越をして眞ニ反正謝罪之道を爲立候様以

御内諭周旋を被

命候儀實ニ至當且寛仁之

御趣意奉感伏候全體

皇國今日之危ニ至候事大罪之幕ニ歸するハ不待論して明ある次第ニ而既に先々月十三日云々

御確斷秘物之 御一條迄被爲及候御事ニ御坐候此末之處如何様之論相起

候共諸侯ニ列し官位一等を降領地を返上

闕下ニ罪を奉謝候場合ニ不至候るゑ於公論相背天下人心固より承伏可仕

道理無御坐候間右之

御内議ハ斷として寸分

御動搖不被爲在尾越之周旋若不被行候節之

朝廷寛大之

御趣意を不奉公論ニ反し眞之反正ならざるもの顯然候得之早々

朝命斷然右之通り

御沙汰可相成儀ト奉存候右

御定議よ下ツテ之

御處置振之公論條理上ニおひて更ニ有御坐間舖若寛大之名被爲付

御處置其當を被失候得之

御初政ニ條理公論を御破之相成候筋ニ



朝權不相振ハ論むる迄も無之必昔日之大患を可生儀相違無御坐候若

御趣意通眞之反正を以實行舉之謝罪之道相立候上ハ無

御願念御採用可相成事之勿論ニ御坐候前條預御尋問尙修理太夫趣意を奉

し評決之形行奉申上候一點之私心を以大事ヲ不可論ハ兼之奉言上通ニ

候間宜舖

御熟考外

三卿ハ御斷決被爲在候様

御示談千祈萬禱仕候頓首謹言

十二月八日

岩下佐次右衛門

西郷吉之助

大久保一藏

岩倉入道殿

【解説】大變革ニツキ後藤等ハ前將軍徳川慶喜ヲ政府ノ首位ニ

列セシメントテ松平慶永等ト謀リ頻リニ策動スル所アリ爲メ
 ニ中山等ノ諸卿亦意動クニ至ル是ニ於テ利通ハ大ニ之ヲ憂慮
 シ西郷岩下ト議シ自ラ本書ヲ起草シ岩倉公ニ提出シタルモノ
 ニテ利通等ノ意見ハ若シ後藤等ノ説ニシテ行ハル、時ハ實權
 ハ依然トシテ徳川氏ニ屬シ王政復古ハ徒ニ名ノミトナルコト
 明カナルヲ以テ斷然慶喜ヲ諸侯ノ列ニ下シ官位一等ヲ退キ領
 土ヲ朝廷ニ返上セシムヘキヲ以テシタルモノニテ岩倉公ハ中
 山卿ニ示シテ協議スル所アリシカ中山卿モ遂ニ意ヲ翻ヘシ當
 初ノ計畫斷行ニ決心スルニ至リシナリ

一五五 岩倉公へ呈せし警備配置覺書 慶應三年十二月 (福原八郎氏藏)

【按】九日王政復古ノ大號令煥發ニツキ豫メ禁闕警衛ニ當ル薩
 兵ノ配置ヲ内申シタルモノナリ

一 御臺所御門 兼參内殿
奏者口

一小隊

隊長

鈴木武五郎

監軍

黒田了助(清隆)

河野四郎左衛門

右豫備隊 御春屋内扣

一小隊

隊長

篠原冬一郎(國幹)

監軍

千田傳一郎(貞曉)

有馬休八

一局口中門之前 湯明殿内扣
半隊宛輪番

一小隊

隊長

逸見十郎太

監軍

飯牟禮齊藏

仁禮新左衛門

右豫備隊 陽明殿内扣

隊長

川村與十郎(純義)

隊軍

平山龍助

永山彌一郎

一准后御門 兼准后局口
中門之前

一朔平御門

一小隊

隊長

赤塚源六(眞成)

監軍

有村甲藏(國彦)

奥青輔

右豫備隊 乾御門内

一小隊

隊長

大迫喜右衛門(眞清)

監軍

伊集院直右衛門(兼寛)

村田新八

一乾御門

半隊

隊長

大砲八挺

監軍

中原猶介

半隊

隊長

渡邊清左衛門 (清村藩士)

一九門外烏丸通 中立賣御門 外邊

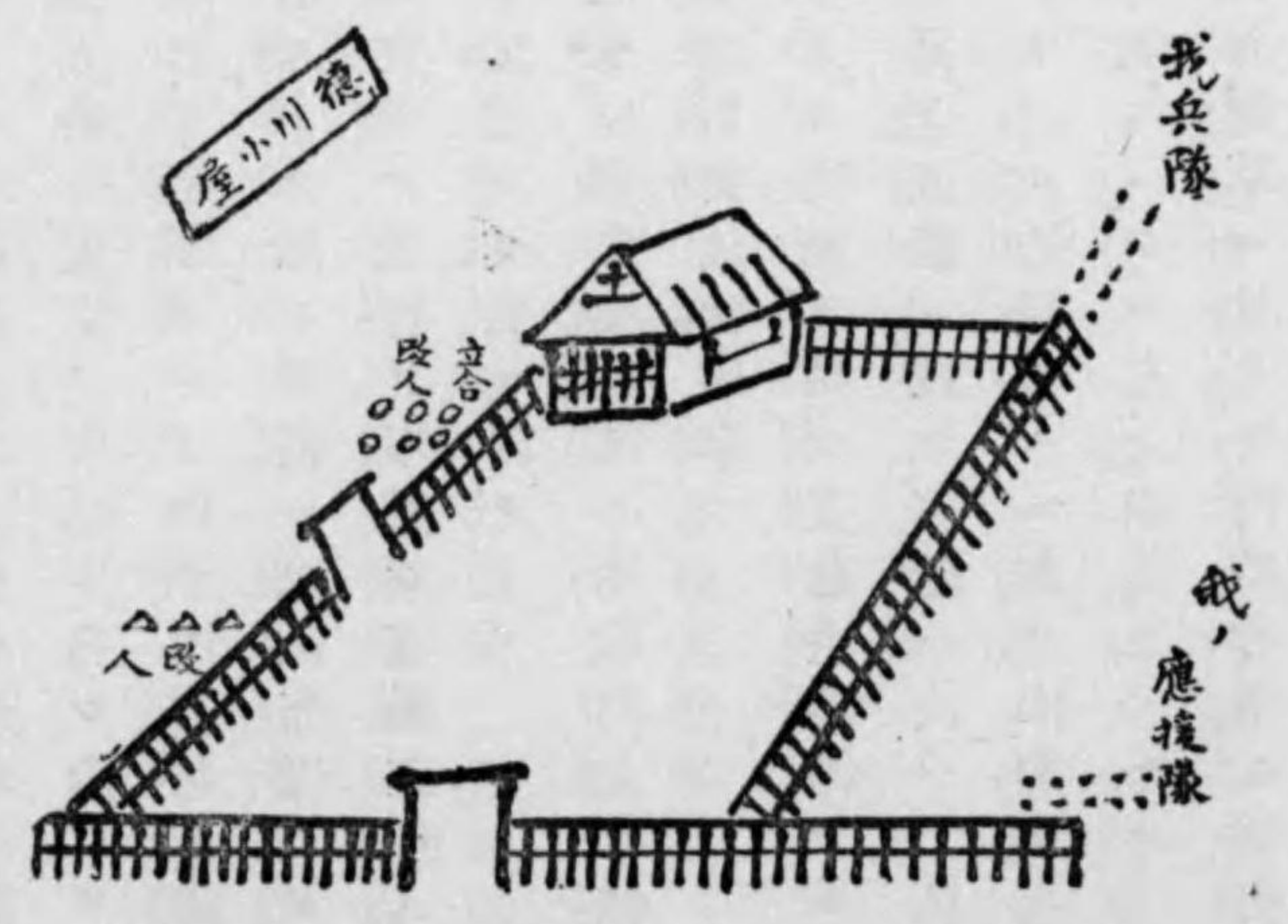
一小隊

一同丸田町通 境町御門 外邊

一小隊

一同寺町通 淨花院扣

一小隊



【解説】岩倉公ハ王政復古ノ大號令煥發ノ前日即チ十二月八日尾越薩土藝五藩ノ重臣ヲ自邸ニ召シ諭シテ曰ク比年幕政失態ヲ重ネ國威日ニ衰頹スルヲ以テ内勅ヲ具視ニ下シ王政復古ノ大策ヲ斷行セシメ給フ五藩ハ忠誠無二ナルニ由リ厚ク御倚賴アラセラル宜シク聖旨ヲ奉體シ奮勵盡瘁スヘシト乃チ各藩主參内ノ命ヲ傳達ス其文ニ曰ク

應召早速登京御満足候隨テ不容易大事御評決之儀有之唯今參朝可有之旨御沙汰候事

且ツ曰ク明九日卯刻ヲ期シ五藩主參内アルヘシ又宮闕警衛部署ノ令各一通ヲ五藩ニ授ケ朝廷ハ決シテ兵ヲ禁内ニ集メ干戈ヲ動かサントスルノ意アルニ非ス惟非常ニ備ヘラル、ノミ宜シク此意ヲ領スヘシト左ノ達文ヲ示サル

王政復古大變革ニ付テハ何時非常之儀出來モ難計依テ右御

場所藩兵ヲ以嚴重警衛可有之旨御沙汰候事

此覺書ハ利通カ岩倉公へ豫メ藩兵ノ禁門警衛配置ニ就キ提出セシモノナルヘシ次ニ掲クル西郷ノ覺書モ亦同シク警衛上ニ關シ岩倉公ニ提出シタルモノナリ

【參考】西郷より岩倉公に呈せし禁門警衛部署覺書慶應三年十二月（福原八郎氏藏）

- 一四門出入ノ刻限嚴重御定被 仰渡度御坐候
- 一四門内御警衛ノ儀ハ以來御親兵ノ内より被 仰付候筋を以て差當り德川家人數引取十津川兵隊へ御堅被 仰付度御坐候
- 但山科十津川ノ義ハ御親兵被 仰出其餘是迄御附武家付以下ノ輩ニも追テ可然ものハ御親兵ノ内ニ被差加度候
- 一右ノ救應ハ諸藩ノ内御人撰ヲ以テ被 仰付度御坐候
- 一日御門邊御堅
- 一南御門邊右同

右尾州藝州へ被 仰付度豫備隊控所ノ儀ハ習學所又ハ紀州以前ノ堅場邊へ被 仰付度御坐候

一 公家御門邊御堅

右土州へ被 仰付度豫備隊ノ儀ハ日野家内へ相控候様被 仰付

度御座候

一 御臺所御門邊御堅

一 准后御門邊右同

一 朔平御門邊右同

右薩州より相勤度御座候豫備隊ノ義ハ御春屋内并陽明殿内乾御門内へ相控候様被 仰付度候

一 御門御堅場所ニ付二十人以下宛ニ可然段承知仕候得共勞佚繰替候次第ノ順も有之候付右ノ應援隊相置度御座候

但別段三所御堅場ノ儀も同斷

一 別段三所御堅場ノ義御沙汰次第半隊ツ、罷出外ニ爲救應半隊備置度御座候

一 御所内警衛ノ儀ハ武門ノ冥加ト奉存候付御門竝三所ノ御堅ハ邸中ノ諸隊繰廻を以相勤候様仕度御座候

一 日御門よりハ御堅人數ノ外往來不相成候様被 仰付度御坐候
但社家ノ分ハ可爲別段事ニ御坐候

一 堂上方何をも公家御門より御出入有御坐度候
但准后御付ノ方ハ別段ノ事ニ御坐候

一 武家ハ御臺所御門ノ外出入不相成段被 仰渡度御坐候
一 准后御門ハ御堅人數ノ外武家ノ出入不相成様被 仰付度御坐候

一 何方よても穴門ノ出入一切不相成様被 仰付度御座候

一五六 蓑田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月十二日 (伊地知峻氏藏)

【按】以下二通ハ王政維新ノ大號令煥發ノ顛末ヲ藩廳へ報シタルモノナリ

中將様益御機嫌克被爲遊御坐御所勞益御順快ニ被爲向候筈恐悅奉存候於御當地

太守様益御機嫌克被爲遊御坐御同慶奉存候陳去去ル五日急脚便より大略申上候通十日迄ニ

朝廷御盡力御發表可被爲在段御内定ニ而最初八日ニ期日相立居候得共容堂公同日就御着九日遷延相成候然處愈八日攝政以下國事掛惣參

内ニ而長防寛大ニ御處置且五卿一條幽閉堂上被免等ニ件々朝議被爲在徹夜ニ而翌九日迄も御退散無之終ニ長侯

老若公被復本官本位早々入洛五卿歸京還家同行被復本官本位幽閉堂上凡而被免候旨 御沙汰相發候此儀ニ有志壯年公卿等相迫り

朝議相始りし由候尤在京列侯も就命參

朝尾越藝等も凡而御參

内相成申候

太守様ニハ御所勞ヲ以御斷被仰立候扱同日四ツ時分

朝議相濟尾越藝ニ三侯御居殘ニ而外官武共一同御退散相成候兼而御退散

次第

御發表ニ而

太守公ニも御參

朝を被期候間右一左右あるや否直々警衛人數手當を被命不時ニ御供揃被仰渡彼是時刻ヲ移シ

御參内ハ未刻頃ニ相成候固より有志宮公卿ニハ 帥宮仁和寺宮山階宮公卿ニハ中山卿正親町三條卿中御門卿大原卿萬里小路卿長谷卿岩倉卿橋本

卿以下壯年堂上等三四十人不時參

内ニ而尾越藝土御國五藩へ九門内六門ニ警衛被 仰付追々人數繰出誠ニ

目覺鋪勢之御國ニハ御臺所御門日御門准后御門警護被仰付候ニ付凡ニ二小隊宛相固乾御門ハ三小隊救應隊相扣ヘ烏丸通丸田町通寺町通ハ一小隊宛救應被差出神速ニ繰出シ一ニ混雜も無之別ニ都合宜鋪相揃申候於朝廷御列候參

内御待容堂公申ノ中刻頃御參ニ凡ニ御揃相成兼

御發表ニ御手順ハ御内定被爲在候得共尙於

小御所宮公卿列候藩士迄被盡衆評一應退散別番ニ通三職ヲ被命候然して

再度於御同所御評議尾越兩侯ヲ以德川氏官一等ヲ降領地返上等ニ事件自

ら訴出謝罪ニ道ヲ立真ニ實行ヲ舉候様周旋ヲ被命

兩公御受相成候

一守護職所司代之儀ハ共ニ免シ會蛤御門固メ之儀も同斷可引取旨從德川

氏

朝廷へ願出其通被

開食蛤御門人數ハ早々引拂相成申候且亦會桑君侯ハ勿論守兵一同二條城へ繰入板倉閣老等登城いし候由城中ニ繰入るハ全ク鎮撫之策ニ出ルト見ゆ當夜ハ七ツ時分列候退散宮公卿ハ宿衛也

一翌十日四時ハ御參内尾越兩公ハ二條城ハ被行向入夜參内藝若公夕刻

參

内容堂公ハ御不參候扱城中之次第ハ兩侯より

朝廷ハ御諭之趣内府公ハ被傳候處此上ハ如何様とも

御趣意通御受可仕与之決心ニ亦寸毫無子細候處何分幕中之處人心不居

合公然

朝廷へ訴出候得て則暴發いし候ハ必然ニ勢ニ亦實ニ鎮撫方ニ於て御

心痛相成於兩侯も御苦心被遊夫故御退城御遅引今日之處一應形行被遂

言上候よめ

御參内尙此上之處越公斷然御振てよとニ亦御盡力可被爲在越公御趣意

此度議定職被命候ハ必定賢能ヲ以被舉候譯無之徳川氏をして實ニ反正
ニらしめ候故ヲ以周旋被 仰付候事と被思召候尙此上ハ決死ヲ以御盡
力迎も成らされハ於御城屠腹之外無之實ニ對
朝廷ハ不及申天下ニ對

御面皮不被爲在与之御確斷ニ別奉感伏次第ニ御座候就ハ兩日ハ
延引可致も難計与之御願ニ候昨十一日夕刻よ御登城相成る由
候得共未其模様相分不申候必定會桑ヲ歸國せしめ候上与之御趣意
被伺候今日中ニ出立いたし候与之説も御坐候右様御憤勵御坐候間貫
徹可致与相考候

一右御發表ニ就も一混雜ハ可生与期居る事ニ御坐候處會桑ニ處右様
相運候も案外無事ニ相濟未程合ハ不相分候得共日々

朝廷御兵力ハ相加候模様ニ備前ちとも清和院御門御固めハ勿論蛤御
門も被命十分人數差出警衛且西ニ宮長州人數早々上京昨日九門内外巡

邏警衛被命公然張出尤家老毛利内匠一昨十日夜旅裝ニ儘參
朝被仰付議定衆より

御沙汰相成申候九門内ニ布屋或ハ幕張等ニ各連日之宿陣ニ兵勢嚴
肅觀ニも冷敷假令此上如何様之變相起り候も萬々差支無御坐十分之
御備ニ御坐候最早今日中會桑進退且城中之次第ニ依而屹と動靜可相
分与相考申候右根本相定候上ハ夫々被參衆議諸事御決定可相成候得共
未餘事ニ涉り不申候今日町便被差立ニ付今日迄之形行荒々申上候九日
以來晝夜參

内ニ別混雜疏略御免可被成下候尙三日中平運丸出帆可被 仰付候
間其便よ委曲可申上候達
御聽候義宜舖御頼申上候以上

十二月十二日

大久保一藏

養田傳兵衛様

追ふ桂大夫小大夫に可然御傳被下度御願申上候

(別記)

一五卿御歸洛ニ付昨十一日春日丸爲御迎船開帆いし候間兩三日中着船可相成奉待候

一長へも右便より入洛之報知ニ相成申候間不遠上京可有之候

一二條城中も別る混雜之様子被相聞申候今日中引拂相成候与之風説

一守護職邸今曉家物等繰出下邸へ引候由

一夜前ハ右邸近邊大ニ相騒放火いし与之雜説紛々之由畢竟右様家物等相運候故と被存候

(別記)

被止參 朝分

攝政前左大臣
左大臣

右大臣
彈正尹宮
前關白左大臣
前左大臣
前右大臣
一條前右大臣
内大臣
日野大納言
飛鳥井大納言
柳原大納言
葉室大納言
廣橋大納言
六條中納言

一三職躰

總裁
議定

野宮中納言
 久世前宰相中將
 豐岡大藏卿
 伏原三位
 裏辻中將
 有栖川帥宮
 仁和寺宮
 山階宮
 中山前大納言
 正親町三條前大納言
 中御門中納言
 尾張大納言

參與

越前宰相
 安藝少將
 土佐前少將
 薩摩少將
 大原宰相
 萬里小路右大辨宰相
 長谷三位
 岩倉前中將
 橋本少將
 尾藩三人
 越前藩三人
 藝藩三人

土藩 三人
薩藩 三人

（別記）

太守様ニも議定職被爲蒙 朝命恐悅御同慶奉存候委曲ニ從政府御問合可
相成候間相省申候右御祝詞旁御 聞上候已上

十二月十二日

一 藏

傳兵衛殿

追々小大夫御上京之儀先便より申上越置候通ニ御坐候間何卒桂大夫
被仰談早々御上京有之様御盡力被成下度平ニ奉願候

【解説】是ヨリ先十月十四日將軍德川慶喜ハ山内容堂ノ議ヲ容
レ上表シテ政權ヲ奉還センコトヲ請フ翌日朝廷之ヲ允ス尋テ
二十四日更ニ將軍職ヲ辭センコトヲ請ヒ又之ヲ允サル既ニシ
テ後藤象二郎等ハ松平慶永等ト謀リ公卿及ヒ在京諸侯ヲ會同

シ慶喜ヲ諸侯ノ上ニ置キ以テ政府ノ基礎ヲ定メンコトヲ主張
ス是ニ於テ利通等ハ大ニコレヲ不可トシ斷然幕府ヲ廢シ慶喜
ヲ諸侯ノ列ニ下シ官位一等ヲ退キ且ツ領土ヲ返上シテ命ヲ俟
ツヘキヲ以テシ猶西郷岩下等ト連署シテ之ヲ岩倉公ニ建言ス
ル所アリ中山中御門正親町三條ノ三卿モ一時後藤等ノ說ニ傾
カントセシカ利通ノ切論ニヨリ遂ニ其ノ計畫ヲ斷行スルニ至
リシナリ又當初利通等カ大變革ノ計畫ヲ後藤ニ謀ルヤ後藤ハ
之ヲ慶永ニ告ケシカ慶永ハ天下ノ大事ナリトシテ之ヲ慶喜ニ
通ス是ニ於テ慶喜ハ大ニ驚愕セシカ會桑以下ノ憤激ヲ恐レ未
タ何等ノ處置ヲ爲スニ至ラスシテ遂ニ九日ノ大變革ニ遭遇シ
タルナリ即チ此ノ大變革ハ主トシテ利通等カ岩倉公ト共ニ計
畫セシモノニシテ辭官納地ヲ勸告シ慶喜ヲシテ大政奉還ノ誠
意ヲ示サシメントシタルナリ而シテ大號令ハ實ニ當時岩倉公

ニ近侍セシ玉松操ノ起草セシモノナリキ猶ホ利通ハ西郷岩下ト共ニコノ時新政府ノ參與ニ任セラレタリコレ利通等カ藩士ノ身ヲ以テ一躍朝廷ノ重職ト爲リ公然國家ノ大政ニ參與セシ初メナリ

【參考】王政復古大號令慶應三年十二月九日

(岩倉家文書)

德川内府従前御委任 大政返上將軍職辭退之兩條今般斷然被 聞食候抑癸丑以來未曾有之國難
先帝頻年被惱 宸襟候御次第衆庶之所知候依之被決 叡慮 王政復古國威挽回之御基被爲立候間自今攝關幕府等廢絶即今先假に總裁議定參與之三職を置れ萬機可被爲行諸事
神武創業之始に原き縉紳武辨堂上地下之別なく至當之公議を竭し天下と休戚を同く可爲遊 叡念に付各勉勵奮來驕惰之汚習を洗ひ盡忠報國之誠を以て可致奉 公候事

一内覽 勅問御人數國事御用掛議奏武家傳奏守護職所司代總而被廢絶候事

一三職人體

- | | | |
|----|---------------|---------------|
| 總裁 | 有栖川 帥 宮(熾仁親王) | 山 階 宮(晃親王) |
| 議定 | 仁和 寺 宮(嘉彰親王) | 中山前大納言(忠能) |
| | 中山前大納言(經之) | 正親町三條前大納言(實愛) |
| | 越前 宰 相(慶永) | 尾張大納言(慶勝) |
| | 土佐前少將(豐信) | 安藝少將(茂勳) |
| | 大原 宰 相(重德) | 薩摩少將(忠義) |
| 參與 | 長谷三 位(信篤) | 萬里小路右大辨宰相(博房) |
| | 橋本少將(實梁) | 岩倉前中將(具視) |
| | 尾藩 三人 | 越藩 三人 |

藝藩 三人
土藩 三人
薩藩 三人

一 太政官始追々可被爲興候間其旨可心得居候事

一 朝廷禮式追々御改正可被爲在候得共先攝籙門流之儀被止候事

一 舊弊御一洗ニ付言語之道被洞開候間見込有之向々不拘貴賤無忌憚

可致獻言且人材登庸第一之御急務に候故心當之仁有之候ハ、早々

可有言上候事

一 近年物價格別騰貴如何共すへからさる勢富者は益富を累益貧者は

益窘急に至り候趣畢竟政令不正より所致民は王者之大寶百事御一

新の折柄旁被惱 宸衷候智謀遠識救弊之策有之候者無誰彼可申出

候事

一 和宮御方先年關東へ御降嫁被爲在候得共其後將軍薨去且 先帝攘

夷成功の叡願より被爲許候處始終奸吏之詐謀に出て御無詮之上は

旁一日も早く御還京被爲促度近日御迎公卿被差立候間其旨可心得

居候事

右之通御確定以一紙被仰出候事

一五七 岩倉公への書翰 慶應三年十二月十五日

(田村新吉氏藏)

【按】山崎警備各國布告等ニツキ公ノ諮問ニ答ヘタルナリ

御奉書拜見候

一 山崎固ノ之儀別ニ就要所長州不被行候ハ、藝藩等ニ亦も被命候御都合

ニ參リ候へハ無此上奉存候交代与申名目ニ候得々何も子細無御坐候條

事あるノ日ニ至ルニ實ニ大事之場所ト奉存候ニ付萬々奉願候

一 各國布令ニ付岩下西郷掛被命被差向候段至極ニ奉存候此節ハ布告文も

有之内情等通置候迄御坐候間岩下一人^{外ニ差添候}被差向西郷ハ御殘し置

被下候様奉願候土藩ハ後藤參候得々十分ニ亦可有之一人々誰ニ亦も可

然奉存候此段ハ

御前迄奉願置候

一市尹掛り藩士ニハ逆も六の舖依る尾藩へ取締を被命候而土弊藩ハ申談巡邏相勤候様被仰付候方可然奉存候段々亂妨ハシ候ものも不
少且會桑潛伏等も自然散し可申人氣自ラ靜謐可仕候

一彦藩勤王等之事全承り不申候事柄不存候得共何共難奉申上候

一於宮中用向之節不憚拜謁可奉願候間左様思召可被下候隠然トハ

し候社あやしミ可申公然御對話申上候儀ヲ誰カあやしみ可申ヤあやし

ミ候而も何をかあし可申や依之却而公然たる社よろしく候とんと奉存

候縮り候得共十分ニ縮り候方よろしくあまじいニ縮り候与伸ルモノハ

彌伸ヒ可申宜々御熟考を奉仰候

右御請答奉申上候間宜舖御披露奉願候客來續ニ延引仕候以上

十二月十五日

大久保一藏

上

【解説】山崎ニハ從來幕兵駐屯セシヲ以テ長兵若シクハ藝兵ヲ以テ之ニ代ラシメンコトヲ以テシタルナリ各國布令ハ王政復古ヲ各國ニ通告スルノ意ニテ其ノ文案ハ利通カ佛人「モンブラ」ノ原案ヲ寺島宗則ト共ニ修正セシモノニテ即チ十八日三職會議ニ於テ決定セシ詔書體ノ布告文コレナリ市尹掛ハ京都市中取締掛ノ意藩士ハ薩藩士ヲ云フ五項ハ宮中ニ於ケル密談ハ却テ注意ヲ惹キ疑惑ヲ招ク恐レアルヲ以テ之ヲ止メ自今公々然對談スルコトノ得策ナルヲ感シ豫メ公ノ諒解ヲ求メタルナリ當時朝廷ニ於テ兩人ノ行動ノ如何ニ注意セラレシカヲ見ルヘシ本書ニ對シ岩倉公ノ返書アリ

【参考】岩倉公より大久保への書翰慶應三年十二月十六日

(大久保家藏)

大久保殿早々平安

具視

連日御苦勞

一水府中納言本國寺等有宮頻リニ御取持甚如何ノリニ候御心得置可給候

一山崎固メ長州之事先不被行候

一有宮警衛是ハ今日長ハ被 仰付候

一各國布告ノリ可被成急事ニ付不取敢貴國ニ有岩下西郷土州ニ有後

藤今一人被召出三與之儘外國掛リ被命候間早々夫々取調へ頼候但

シ公卿ニ有も何時被命候も壹人可立 勅使候

一久留島事今日參 朝伺 御機嫌且御警衛向可被 仰付候

一何分ニも長州早く上京渴望此上よろしく頼存候

一町尹懸田宮如雲外ニ薩土ハ壹人ツ、取締被 仰付度内談候

一彦藩勤 王之事早々三條丹羽ハ御聞と存候是ハ虚ニ有之間敷と

ひ虚ニ有も大ニ其勤 王ヲ鳴し御登用候ハ、至極ニ存候既ニ本國

藤堂ト彼是取合之旨ニ候何卒し早ク大ニ採用可然ハ親藩勤 王
之始め大ニ人心とる所可有之事と返ス、深謀遠慮と云へらん
是ハ後悔謝罪之者も追々出来と存候此事三條家來ハ承候儘小子所
存内談候返事次第斷然可取計と存候

右早々内談候也

二十六

一五八 西郷吉之助への書翰 慶應三年十二月廿一日 (天久保利武藏)

【按】伏見ノ巡邏警戒ニツキ打合セタルモノナリ

尙々徳山公着ニ付長候上京之有無相分候事ト岩倉公度々御尋ニ有候

尙御尋問可被下候

拜見大洲之事別番之趣ニ有也昨日御達濟ニ相成候与被存候へとも今日尙

御談申上候様可致候

一 澁州之儀品士の御引合何分爲御知可被下候御文言之處調文有之可申歟
一 淀の會大砲相備橋本邊の人數繰出伏見新撰組横行之次第現在奉對

朝廷異心ヲ顯シ候義夫ヲ邪佞ノ爲一言

朝廷方御沙汰被成兼候ハ古今衰世之習トハ乍申可慨可嘆依而伏見之義
御當地市尹の兼務且長士御國之儀ハ洛中外巡邏被

仰付候付伏見之儀も巡邏イタシ非法ヲ警戒候様斷然被

仰付度段申越置候被 仰付候ハ、早々人數差出鎮撫可仕旨申上置候其

段品士の御通置可被下候

一 松木書面只今相達候御一覽可被下候

右等御答早々御濟次第鳥渡御參仕被下度旁御談可申上候岩公左様

申上候様御沙汰之頓首

十二月廿一日

一 藏

吉之助様

別番乍御面働宜敷奉願候

【解説】九日ノ大變革後舊幕麾下及ヒ會桑兵等ハ前將軍徳川慶
喜ニ對シ辭官納地ノ朝旨アリシヲ憤慨シテ不穩ノ狀アリ依リ
テ慶喜ハ松平慶永ノ議ヲ容レ十二日部下ヲ率キテ大坂ニ下ル
然ルニ其後幕兵ハ仍ホ淀橋本伏見邊ニ出沒シ形勢不穩ナルヲ
以テ薩長土藝四藩ノ兵ヲ派遣シ之レカ警備ニ當ラシメタルナ
リ而シテ伏見取締ノ事務ハ京都市尹田宮如雲へ兼勤ヲ命セラ
レタルカ四藩へノ達文ハ次ノ如シ

(各通)

薩州

長州

藝州

土州

伏見表今度御變革彼是ノ虛ニ乘シ狼藉者横行人心不安趣相

聞候ニ付急度巡邏鎮定可有之御沙汰候事

十二月廿一日

然ルニ廿三日ニ至リ土藝二藩ハ之ヲ辭シ遂ニ兵ヲ出サ、リキ上ノ書翰中大洲ハ伊豫ノ加藤遠江守淡州ハ清末藩主毛利淡路守品士ハ品川彌二郎・松木ハ寺島陶藏後ノ宗則ナリ松木書面ハ大坂ヨリ急飛ヲ以テ京都ニ送リシモノニシテ政體變革ヲ各國公使ニ布告スルコトニ關シタルモノナリ次ニ之ヲ掲ク

【参考】寺島陶藏より大久保への書翰 慶應三年十二月廿一日

(岩倉家文書)

廿日御仕立之貴墨拜見仕候同日此地よりも一封差上申候其節申上候趣ハ御地ニ御評議之事ト大抵請合仕申ト奉存候昨日午後英公使筆官并サトウ兩人參リ候ニ付尾越ハ歸政ニ取計ヒ引請居候得共未定ニ而延引ニ及候段成行委細申通候處サトウ申候ニテ御布告被出可然義ハ幕ハ返書不參前ニ同人丈ニ心付ニ而申上候譯ニ有之其節京都ニ而

未定トハ不存申實ハ外國公使一同も相手無之候而テ掛合出來不申候ニ付從來引合居候政府此後如何可致哉ト問合候處今日迄ニ通ニて心得旨答書ヲ得候上テ今日用辨ニ欠キ候義無之候由申聞候就而右兩人之案ハ

- 一 歸政未定之間布告被成候事尤不宜若國人歸服不致候節ニテ外國人笑ひ可申候
- 一 英ハ薩と私論相合せ候よし幕人皆疑ヒ居候間此節英ハ殊更用心致し偏頗を避居候事
- 一 佛ハ東を重んじ蘭ハ西を愛し候體相見ヘ英と米ハ偏意なく中央ニ相立ブロイセンとイタリヤハ色々申せとも新參之國ゆヘ事情不貫不足取

一 御布告案文簡よして外國布告之體よかなひ候得共原文之書法を示し可申とて筆者書認附て言案文之末ニ未定之語不宜是ハ拔取可被

成其餘布告之本文如何とも日本体ニ適ひ候様御認可置原文と全不
合体裁至極宜敷原文直譯と全合候るを英人之指示と被疑可申大意
違ひ不申候ハ、本書ニ 天皇と被仰候とも詔書之語御加相成候と
も構不申尤布告之体ニて放膽形容之語句不宜たとへて後藤り建言
中ニ洗といふ字有之此等ハ形容之文字よして改とか除との申字ニ
可致當り前有用之語ニ可致儀ニ御坐候

一 布告文ふま 主上之御名一ツ御印一ツあるのミよて足り申候其外
ニ總裁より大名の名印を加ふるに不及候

一 幕之内存を察するお官爵土地を決して歸し申間敷却る兵營修復之
様子を見るニ逆寄可致從來之通ニ安閑として彼より官と地を歸
を御待被成候事々萬御甲斐無之幕領のみ削り他之候領を不差出
候事外國人ニ至當と不被存候此説ハ兩人之間ニ政府附之土地幾許と定
と申ニ付能存不申候得共豐臣氏天下平定之後徳川氏は其儘皆取り候京師へ御
宛行に限り有之差上候得共京師より被宛行候分幾許と定り候事承り不申候と答

候處本文之
説を申間候

一 政體變革之致方々萬國ニお仕損したる經驗御見合可被成方尤宜衆
議と申者ハ幕も諸侯も残り無御加可被成尤小諸侯を大諸侯よて夫
々兼帶致し候間可然今日政務局々取扱之頭々唯一人命せらるへし
二人必不宜局々ニハ外國掛之類也尤其下之屬吏々頭吏代り候るも
跡ニ残り居舊例可取行事ニ御坐候

右之通申出候ニ付爲御見合申上候尙御詮議之所被仰聞候様奉待上候
以上

十二月廿一日

寺 島 陶 藏

大久保 一藏様

一五九 西郷吉之助への書翰 慶應三年十二月廿一日 (西郷菊次郎氏藏)

【按】本文ハ西郷ノ出仕ヲ促シ追書ハ備前侯ノ上京ニツキ打合

尾公只今御參被爲遊候寛々御仕舞ニ御參相成可然与奉存候此旨早々以上

十二月廿一日

追テ備前一條ハ直様今日御運可相成与之事ニ御座候依 召上京之向ニ被相聞候へ共暫時見合形勢模様ニ依 王事勤勞以たし候様与之趣意宜舗ると之御事ニ候付可然段申上度候左候而代リ大洲ハ小藩故上京被命西之宮警衛ハ備前ニ被 仰付候筋御取究相成候其段宜舗御通置可被下候神速繰出十分相固候様御談置可被下候

西郷吉之助様

大久保一藏

【解説】本文尾公ハ徳川慶勝ヲ云フ追書ノ備前一條云々ハ岡山藩ノ方向ヲ願慮シ進ンテ王事ニ勤ムヘキ旨ノ朝命ヲ發シ攝津西之宮ノ警衛ニ當ラシムルコトニ決シタルナリ

一六〇 品川彌二郎への書翰 慶應三年十二月廿一日

(岩倉家文書)

【接】岩倉邸へ參邸アルヘキ旨ヲ通シ且ツ徳山藩へ内達ノコトニツキ問合セタルモノナリ

尙御多祥奉賀候然モ明朝モ御用被爲在候ニ付岩倉様へ御參殿相成候様御通知申上候様承り候御承得可被下候將亦別紙只今被爲御越當分表向上京ニハ無之候故本藩へ御達被下候様ニトノ願意ニ候尙御再考被成下度且御文面等ニ處異條有之間舗候得共明朝賢兄御參殿ニ事候間委細御聞取被下候様御返詞申上置候ニ付左様御含可被下候何モ本藩へ御達おらてハ相辨し中間舗相考申候尙御賢考ヲ以御申上有之度此段昏面ヲ以申上候頓首

十二月廿一日

大久保一藏

品川彌二郎様

【解説】本書中ニ所謂別紙ハ之ヲ逸ス

一六一 寺嶋陶藏への書翰 慶應三年十二月廿二日

(大久保家藏)

【按】在坂ノ寺嶋カ英國公使通譯官「サト」ト應接ノコトヲ報シ
來リシニ答ヘタルモノナリ

貴翰今朝拜見サト一ハ御談判之趣委曲承知以たし候然處段々運兼候次第
も有之暫時之處御見合之筋ニ

朝議も相決候何レ内輪之御治定第一之事候ニ付猶於此方盡力之次第も可
有之候間左様御得心可被下候左候而サト一方へ別番之趣ヲ以今一應御質
問克々彼之口氣御聞取可被下候何分御懸合申越候迄ハ御滞坂模様相分次
第御通可被下候ハ、兩三日中ニハ尾越周旋成否相分可申候此段御答旁艸
々如此御坐候以上

十二月廿二日

大久保一藏

寺嶋陶藏様

【解説】是ヨリ先十六日利通ハ寺嶋ノ起草セシ大政一新ヲ外國

ニ通告スル國書ノ文案ヲ朝廷ニ上ル朝廷岩下方平後藤象二郎
ヲ外國掛ト爲シ廿一日將ニ勅使差遣ノコトヲ公布セントス會
マ松平慶永等異議アリ詔書中列藩會議ヲ興スノ語アルニ今在
京ノモノ僅ニ四五藩ニ過キス宜シク諸藩ノ上京ヲ待チテ之ヲ
實行スヘシト因テ暫ク其期ヲ延ヘラル利通布告文ノ遷延ヲ憂
ヘ乃チ寺嶋ヲシテ各國ノ態度ニ付キ「サト」ノ意見ヲ窺ハシメ
タルナリ別紙ハ之ヲ逸ス(十二月廿八日付養田ヘノ書翰参照)

【参考】寺嶋陶藏より大久保への書翰 慶應三年十二月廿五日 (大久保家藏)

去廿三日曉貴書相達拜見仕候即日サトウハ書面差出遊歩之序參り吳
候様申遣候處昨日午後三時筆官ミットホルト同道ニ差越候ニ付彼
仰聞候六ヶ條之件々一々詳ニ解キ諭申候處右答ニ細事ハ申上候ニ及
ます唯二ヶ條之事ニ十分ニ御坐候其餘彼是申上候も無用ニ屬シ

可申候旨承候間右二ヶ條別紙申上候通ニ御坐候以上

十二月廿五日

寺島陶藏

一 藏様

侍史

別紙

一 朝廷ヨリ御布告相成候手續先幕ハ諸國公使を京師ハ差遣候様御達相成候事

此一ヶ條ニテ布告之手續十分ニ御坐候京師ハ公使等ニ參進と幕より申遣しニ相成候ハ、最早公使等ニ政權

朝廷ニ移リ候様信し可申候京ニハ應接所御手當ニ相成居不申候とも又ハ外國掛リ之御方治定無之とも又ハ諸港ニハ諸奉行未タ必也朝命ニ從ヒ不申候とも其餘瑣細ニハ御手都合御心配及不申唯幕ニ右之段御達ニ相成若幕より公使等へ其旨を傳へ候ハ、何事も皆

朝命ニ歸し可申儀と外國人ニ信し可申候若又幕ハ不被仰候ハ直ニ上京致セト公使ニ御達ニ相成候とも幕より上京を妨げ可申候いつを幕取次之處肝要ニ御坐候

一 王師起リ候節執を之方ニハ外國より決しハ應援可致義無之殊ニ佛人幕を助候義萬々無之候

佛帝近日甚々多用ニ有之且假令佛艦唯一艘のミ迎も日本ニハ應援致その餘力ニ無之候萬一も其氣指し見得候ハ、直ニ他之條約諸國より差留可申候

一六二 太政官代及ひ徳川氏處分に關する覺書

慶應三年十二月（寺島伯爵家藏）

【按】太政官代ヲ設ケ三職ヲ置クノ件ト徳川慶喜辭官並ニ領地返納ノ事ニツキ記セシモノナリ

太政官代ヲ設三職ヲ置

總督 議定 參與

總督 宮

議定 有志之公卿
賢名之諸侯

參與 堂上地下之差別ナク草莽之士
トイヘル人材ヲ以テララル

王政復古之大變革ニ付今般徳川慶喜辭官并領地返獻ノ兩事尾越兩侯ニ命
セラルトイヘル未右 奏達ニ及ハス此兩事件

叡慮確斷不可動之

朝議ナリ然るニ今日迄遷延ニ及人心混雜物情騷然不可謂之大害も難圖仍

亦兩事斷然

朝命ヲ以可被

仰出与之事

【解説】當時慶喜ノ辭官并ニ領地返納ノコトハ其斡旋ヲ朝廷ヨ
リ尾越兩老侯ニ命セラシト雖モ遷延日ヲ亘リ決セサルヲ以テ

十五日斷然朝命ヲ以テ慶喜ニ達セララル、ニ決シ其案文ヲ朝議
ニ附セラレタリ此書或ハ利通カ岩倉公ニ提出セシモノニアラ
サルカ

一六三 岩倉公への書翰 慶應三年十二月廿三日

(岩倉家文書)

【按】岩倉公ノ疾ヲ推シテ參朝アランコトヲ促シタルモノナリ
越前侯ヨリ下參與中へ示談之趣華城一條時日遷延今日ニ至リ候儀ハ實ニ
大罪無申譯次第此上ハ兩條

朝命ヲ奉して尾越下坂致し必死盡力ニ及フヘク其上奉せざるものハ親藩
ト雖も斷して討より外無之事ニ候仍亦右

御沙汰相降候様盡力頼むと之趣ニ御座候就亦去 御沙汰振之處御大事ニ
亦辭官且領地返獻之文字明瞭御達不被爲在候亦難相濟只今正三卿へ奉伺
候處 御沙汰相成候得共御前御參朝不被爲在ト之御事候由承申候得共右

之次第ニ付るを推す御參朝ニ右御運ひ相付候様奉願候甚御無理トハ奉
存候得共尾越よりも昨日より之續合有之トカ申し頻リニ御前之御參朝を
奉願由ニ相聞候御前御一人様之故を以テ相決不申候も如何ニ奉存候別
大幸之機會御座候ニ付既ニ今朝云々御大決も被爲在候御事ニ御坐候間願
くハ御參朝ニ断然ト朝命之御運相成候様奉願參殿奉申上度候處尾越よ
り御使差立候ト之事故態ト此段不願恐以紙面言上仕候謹言

十二月廿三日

大久保一藏

上

【解説】初メ九日ノ朝議ニ於テ決セシ徳川慶喜ニ對スル辭官納
地ノコトハ松平慶永ヨリ之ヲ慶喜ニ内諭セシカ幕府黨ハ大ニ
激昂シ將ニ兵ヲ擧ケ九日ノ大變革ヲ覆サント謀ル依リテ慶永
ハ大ニ之ヲ憂慮シ慶喜ニ勸メテ部下ヲ率キ一時大坂ニ下ラシ
ム既ニシテ十四日朝議ノ席ニ於テ岩倉公等ハ右二件周旋ノコ

トヲ慶永ニ促ス慶永答フルニ既ニ人ヲ大坂ニ遣リシヲ以テ兩
日ノ猶豫ヲ請フ然ルニ其後後藤象二郎ハ徳川慶勝及ヒ山内容
堂ノ意ヲ啣ミテ岩倉公ヲ訪ヒ二件ノ緩和修正ヲ請フ應セス十
五日後藤ハ更ニ岩倉公ヲ訪ヒ容堂手書ノ朝命書案ヲ示シ此ノ
如クナラサレハ人心ヲ服スルコトヲ得スト陳ス岩倉公又之ヲ
斥ク二十二日大坂ノコト遲延ノ故ヲ以テ慶勝自ラ下坂シ朝旨
ノ貫徹ヲ謀ラント請フ朝廷之ヲ許ス既ニシテ是ノ日朝議アリ
慶勝慶永ハ朝旨草案中ニ「納地」ノ事アルノ故ヲ以テ容堂案ヲ主
張シテ已マス當日恰モ岩倉公ハ疾ヲ以テ朝議ニ列セサリシカ
本書ヲ贈リ利通ハ切ニ公ノ出仕ヲ促シタルナリ

一六四 岩倉公への書翰 慶應三年十二月廿四日

(大久保家藏)

【按】岩倉公ノ諮問ニ應シ徳川氏へノ御沙汰書案ヲ提出シ之ニ

關スル意見ヲ具申シタルモノナリ

今朝拜承仕候兩條

御達之儀尙亦熟評公議ヲ盡候處迎も鎮撫ヲ主ニシテ奉願候趣意ニ被雷同
條理ヲ失候事如何ニモ

御體裁ニ於テ不可然天下萬世ニ亘リ

御盛舉之御瑕瑾遺憾無此上奉存候仍亦別紙之通評決愚意相認申候間差上
候

一別紙之通御確定之上ハ一字一點及御添削不爲出來候ニ付如何ト尾越兩

候ハ御示諭若此上色々申上候ハ、無御採用左様相あらハ是迄之手續ヲ

以兩候又ハ家來之者早々下坂五日ヲ限リ盡力御届可申出若其儀も不出

來候ハ、不被爲得止候ニ付

朝廷ヨリ斷然

御趣意通御沙汰相成候外無之トノ御大決斷之外無御坐ト奉存候

右今日御決議實ニ御大事之場合再三再四勘考評議仕候次第乍恐以
紙面奉言上候以上

十二月廿四日

大久保一藏

上

別紙

一今般辭職被聞食候付亦矣

朝廷辭官之例ニ倣ヒ前内大臣と被

仰出候事

一政權返上被

聞食候上亦御政務用途之分徳川領地之内夫々取調之上天下之公論を以
て返上候様可被 仰付候事

【解説】岩倉公ハ病ノ爲メ廿三日參朝スル能ハサリシヲ以テ朝
議決定スルニ至ラス依リテ慶永容堂等ハ岩倉公ニ會見シ更ニ

德川氏ノ爲メ朝命條件ノ緩和ヲ歎願スル所アリ岩倉公ハ乃チ利通ヲ召致シ二件ヲ諮問ス是ニ於テ利通ハ西郷品川等ト議シコノ案文ヲ呈シ其ノ斷行ヲ力説シ一字一劃ノ添削ナキヲ望ム旨ヲ以テシタリ病中ノ岩倉公ハ中御門卿ヲシテ利通ノ案ヲ朝議ニ付セシメシニ尾越土三藩主及ヒ重臣等努メテ領地返上ノ四字ヲ削除センコトヲ主張シ議定ノ公卿モ亦之ニ動カサレ遂ニ返上ノ二字ヲ削除シ利通ノ案文第一項ハ其儘ニ存シ第二項ハ「御政務用度ニ分領地ニ内ヨリ夫々取調ニ上天下ニ公論ヲ以テ御確定可被遊候事」ト改竄セラレタリ二十六日慶勝慶永ハ諭書ヲ携ヘ大坂城ニ至リ慶喜ニ之ヲ授ケ奉命ヲ勸告シ三十日ニ至リ漸ク復命スルコトヲ得タリ然カモ奉命ノ實行ハレス舊幕兵ハ討薩表ヲ作り大舉上京セントシ形勢ハ益々切迫セリ

一六五 品川彌二郎への書翰 慶應三年十二月廿五日（仲尾義三郎氏藏）

【按】徳山藩世子參朝ノコトニツキ打合セタルモノナリ

益御安祥奉拜賀候然ハ致承知候徳山侯御參之事相伺候處表面御着之御届相成候得夫直ニ相運候付誰様もてもよろしく候ニ付御届差出相成候様可致之御事御坐候仍而參與御役所迄右之御取計相成度御案内無御坐候ハ、此方留主居之方之者御差添申上候様可致此旨早々奉得御意候已上

十二月廿五日

品川彌二郎様

大久保一藏

當用

【解説】徳山藩世子毛利元功ハ吉川經幹老臣宮莊主水ト共ニ十九日入京シ廿六日參朝シテ毛利敬親父子及ヒ支藩主ノ官位復舊ノ恩命ヲ謝セリ

一六六 桂右衛門への書翰 慶應三年十二月廿八日

(島津家文書)

【按】徳川氏處分ノ經過ヲ京都ヨリ藩地へ報シタルモノナリ

尙々熊藩溝口津田參與被召出候得共矢張扶幕論ニホスツハリイケ不
申候兎角ニいさし方無御座候長藩廣澤井上出京候間大ニ力ヲ得申候
一翰奉拜啓候嚴寒ニ砌先以御機嫌克被爲成御奉職奉大慶候隨ホ私事無異
儀碌々相務罷在候間乍憚息尊意思召可被下候御當地形體去ル九日

朝廷大御變動爾后ニ形行大略ハ同席蓑田へ申遣し候間自ら御聞取可被下
候事与相略申候尾越公當分御下坂中ニホ此度ハ死生之間被爲立御盡力可
被爲在トニ御受ニホ御座候間多分徳川氏上京ト申場ニハいさし可申カト
相伺申候

朝命通私心ホキものを以て御投出し御奉戴ト申事ニ相成候へハ實ニ無此
上反正ニ實行舉リ更ニ無異論ものニ可有御座候へとも未安心ニ地ニいさ

り兼候儀ト苦心候事ニ御座候下坂已來ニ舉動甚敷不穩次第ニホ段々物議
も騒然せる次第ニ及固より會桑之所ニおひても無異條歸國ニ時宜ニハい
さし兼可申旁

朝廷ニ於ホも

勅命ヲ以御推し相成不申候へホ平穩ニ治リ付兼可申儀ト愚考仕候是程ニ
御大變革ニ被爲及候ヲホましほニホ爲御濟相成候へホ舊日より相増
候場合ニ立チいさし可申候間只々

朝議無御動搖處而已千祈萬禱仕盡力候事ニ御座候先御窺且形行申上度草
々如此御坐候尙奉期后音候謹言頓首

十二月廿八日

大久保一藏

桂 右衛門様

侍史

追ホ小大夫君御上京相成候儀此内蓑田へ申越候間定ホ御承得被爲下

候半何卒御盡力被成下候様萬々奉祈候最早御發足相成候カとも相考
頻ニ奉待候事ニ御座候

【解説】前文尙々書中「スツハリ」ハ「總て」ノコト「イケ不申」ハ「駄目」ノ
方言ナリ「尾越公御下坂中」云々ハ當時徳川慶勝松平慶永ハ辭官
納地ノ諭書ヲ齎ラシ大坂城ニテ徳川慶喜ニ説得中ノ意ニテ慶
喜モ此度ハ必ラス奉命上京ニ及フヘケレトモ果シテ反正ノ實
舉カリ會桑兩藩事無キヲ得ルカ利通等カ之ニ對シ頗ル疑ヲ存
シタルヲ見ルヘシ

一六七 蓑田傳兵衛への書翰 慶應三年十二月廿八日 (公爵島津忠承君藏)

【按】以下二通ハ十二日以後ニ於ケル朝廷ノ狀況復古黨幕府黨
ノ舉動及ヒ諸藩ノ形勢等ヲ藩廳へ報告シタルモノナリ

一翰拜呈嚴寒之砌乍恐

中將様益御機嫌克被爲遊御坐恐悅奉存候於御當地 太守様御同然被爲遊
御坐御同慶奉存候次ニ貴所様ニも彌御安康被成御奉務奉欣然候陳去ル
九日

朝廷大變革十二日迄之形情略申上置候通ニ其後之模様別紙ニ相綴差上
候徳川氏爲鎮撫下坂未

朝命奉戴之實効舉り不申候尾趣兩公御周旋之處正月元日之期日ニ御坐候
間夫迄ニ結局相分可申候外國ハ徳川氏より返詞之書面等一見いさし候得
去中々恭順之趣意相見得不申眞實

朝命ヲ奉シ反正ニ至リ候事ハ無覺束被存申候乍去尾越土公之御趣意ハ是
非輕裝ヲ以テ徳川氏ヲ上京せし先兩事件御受之奏聞ヲあさしむるト之見
込ニ此節御達之御文面も尾越御願通

朝廷より被相下候間必定上京ト申場ニハ相成候半ト被伺候
朝命通無異議御受ニ相成候得去重疊ノ事ニ候得共旁熟觀仕候得去意底不

可測候必安心難仕事ニ御座候固より會桑歸國等之一事も有之無事ニハ治
リ相付申間舖カト愚考仕候

朝廷ニ處岩倉公御一人ニ、餘ハ不足取實ニ心痛ニ次第御坐候處三條卿御
上京相成大ニカヲ得候事ニ御坐候是ニハ

朝廷一層ニ御氣力相増御同慶此事ニ御坐候勤

王之藩も段々相起り戦争ニ相成候モ

朝廷御兵力ハ十分ニ決テ懸念無御坐候外國ニ處サト一ニ寺島より引合

セ彼ニ口氣も舊幕ヲ助ケ候儀ニ無御坐候今日ニ相成候ニ、下一同ニ人心

今般徳川氏不逞ニ所爲を惡ミ候様相成大幸ニ至御坐候兎角結局ニ次第ハ

追々可申上候平運丸就開帆別紙二冊相添大略ニ形行申上候奉達御聽候儀

可然御取計可被下候御伺旁公私取交早々如此御坐候頓首

十二月廿八日

大久保一藏

養田傳兵衛様

【解説】本文中「外國」は徳川氏より返詞の書面等云々トアルハ徳
川慶喜カ是ノ月十六日各國公使ヲ大坂城ニ引見シ老中板倉勝
靜ヲシテ薩長等ハ勅ヲ矯メ諸藩ノ公議ヲ待タスシテ將軍職ヲ
廢セリ然レトモ幕府ハ舊ニ仍リテ外國トノ條約ヲ遵守シ交際
ヲ全ウスヘシトノ意味ヲ告ケシヲ云フ即チコレニ依リテ慶喜
カ九日ノ大變革ヲ承認セス隨テ新政府ヲ眼中ニ置カサリシヲ
知ルヘキナリ而シテ利通等ハ幕府黨ノ舉動ヨリ察シ遂ニ開戦
ノ避クヘカラサルヲモ豫測シ居タルナリ別紙二冊中ノ一冊ハ
次ニ之ヲ收ム而シテ他ノ一冊ハ今コレヲ逸ス別冊中大藏大輔
ハ松平慶永・乾泰助ハ後ノ板垣退助中沼了三ハ京都ノ儒者陽明
學ヲ以テ聞ユ後ニ侍講タリ

十二月十二日後京師事情大略

一 十二月十二日迄ノ形勢町飛脚より申上候通ニ御坐候同日尾老公二條城御登城ニ御參朝ニ御言上之趣兩事件辭官領地返獻之事於慶喜之謹御内意之御趣奉拜伏候得共臣下一同沸騰いさし鎮撫之所實ニ心痛仕候仍尾越兩人より禁闕之下ニ於聊之事より變動を生候之乍恐主上御幼弱殊ニ外夷相迫り候砌甚奉恐入候付今晚慶喜會桑を引連下坂仕候右之御伺之上可取計之處大罪ハ兩人ニ引請候賦ニ相決し候ト之御事ニ御斷書并下坂之上ハ早々鎮撫兩事件屹度奏聞相成候儀ハ御受ト之御紙面二通御差出被聞食置候ト被仰出候事

一 十二日夜中徳川氏會桑ヲ引上下大勢御當地發足下坂相成候事

一 下坂之儀大ニ謀略有之華城ニ根據し親藩譜代ヲ語らひ持重ノ策ヲ以五藩ヲ離間し薩ヲ孤立ノ勢ニおし隠ニ

朝廷ヲ謀り挽回せんと之密計ニ候由異說紛々タリ

一 十三日第一等第二等ノ大策確斷して言上いさし候様岩倉公より於宮中御達有之評議之上第二等ニ決して及言上候事

但第一等ハ四藩ノ議論離合ニ拘ラス薩長ノ兵力ヲ以何ク迄モ干戈ヲ以朝廷ヲ奉護シ成敗ヲ天下ニ任セ戰ヲ一圖ニ決ス等ノ事

第二等ハ暫ク尾越ノ周旋ヲ見徳川氏於大坂鎮定ノ上兩事件御受眞ニ反正ノ實行舉リ候ハ、寛大ノ御處置ヲ以既往ヲ咎メス議定職ニ御採用從テ公卿上ニ於テ攝政尹宮等ヲ除ク之外大ニ御採用其餘列藩トイヘトモ廣ク御用ヒ氷炭相合シテ皇國ヲ維持スル等ノ事

一 右兩條ハ九日一舉御定算ニ通萬事

叡斷ニ出て一戰ト相成候上ハ第一等ニ出るノ外無之候得共八日より徹夜之朝議ニ九日十字比御退散相成候時宜合ニ尾越藝三公ハ其儘ニ參

朝ニ容堂公四時頃御參夫より小御所之衆評トなり越土公大ニ徳川氏

ヲ助即夜參

朝ヲ被命御評議席ニ被召加度との意外之御大論殊更土藩後藤あるもの必死ニ是ヲ扶助し殆ト危キニいふる反正之實行舉り候上からてハ御採用不可然云々賢くも

太守公御建言被爲在候尙紛々として不決御勘考与ノ事ニ亦一旦御開キニ相成此間後藤ある者頻ニ周旋盡力モ臣等

太守公を奉助碎身して是ヲ論破し一藩ヲ以漸く是を拒ヲを得終ニ尾越公兩事件御内諭之趣ヲ奉し徳川氏をして反正ノ實行ヲ舉しむる之周旋ヲ御受ト相成再度於小御所御評議尾越公御受之趣被遂言上せる御都合なり故ニ第二等ニ出るニ非されハいふし方あり

一十四日土越公參

朝於小御所御評議席華城ノ情態如何ニヤ段々浮説流言被相行物情騒然不可謂之變も難圖候得ハ早々周旋之功舉り候様被 思食候云々御詰問

ニ亦越公何とも恐入仕合ニ御坐候家來之者下坂爲致置候付兩日中ニハ報知可有之云々御答ニ被及候

一同夜後藤を以岩倉公ハ越土公より御願之趣於御評議席御詰問ニ相成胸中如割奉存候就右御内談申上度候付御面會申上度云々ト岩倉公御答ニ御決定之大事件一人ハ御内談トハ御當惑ニ思食候間御斷被成たしと後藤叩頭して頻ニ乞不得止御面會之處越土公より華城一城ニ付亦夫兎角六ヶ舖甚心痛仕候何卒御勘考ハ被爲在間舖ヤト岩倉公曰く以て之外ニ被存候既ニ

先帝願命ノ次第も被爲在當今確斷ヲ以被 仰出候一令ニ候を鎮撫之不行届ヲ以被曲候亦夫所謂朝令暮改之譯御新政ノ今日ニ當り必定皇威不振之基ト相成候大藏大輔殿ニハ死決を以御受ニも被及滿朝感伏必モ成功ノ奏あらん事ヲ今日迄も一同欣慕いふし候次第ニ候然ルニ不存寄御詞ト覺候云々ノ御答ニ閉口之由頻内訴百端然ラハ

朝廷斷然

御沙汰ノ外無ト御答候處いゝし方なしとの向ニ引取ノ由

一十五日後藤より岩倉公ハ兩事件御達之紙面草稿容堂直筆ニ相認候其趣所領之内を御用途ニ年々差出候様可仕云々此通ちらて迎も鎮撫行届不申候間是非此通ニ御沙汰相成候様若シ御採用無之候ハ、歸國御暇之外いゝし方なき趣ヲ以奉迫岩卿御答ニ萬々左様ニハ參兼候就ハ容堂殿儀ハ柱石ト御依頼思食候然るニ御採用を多きはとて歸國御暇ト申して天下ニ面目あらハ勝手ニ可被致早々御暇可被下与御突切相成候處閉口して引取亦々申出候ニハ容堂ハ申聞候處夫ニハ相濟不申候左様からハ此通奉願トテ大同小異ノ草稿持參いゝし是も御同意ニハ不被存候得共御勘考ノ段御答ニ相成たる由

一十六日外國御布令一條御評議有之此方ヨリ草稿差出候モンブランノ一紙ヲ取捨シ寺島著述イタシ候御布令一條ハサトヨリ相通候趣モ有之仍而言上ニ相成 參與一同異論無之与ノ事ニ岩下佐二右衛

門殿後藤象二郎ハ外國掛迄も被仰付候四藩議定職ハ別段御下問も被爲在候處異存不被在トノ御答ニ相成候由

一廿日外國御布令一條御決定議定職外國掛正三卿越公之處ニ御治定被爲在今日爲御加判五藩被命參

朝候處段々異論相立越公ハ外國掛も御斷後藤儀も同斷容堂公御建白も有之終ニ不相行候必定徳川氏ヲ憚り候ハ事ト被伺候

一廿二日今日尾老公御下坂御暇御願出何分及遅引候段大罪一藩ニ歸し候此上ハ下坂仕死生之間ニ立

御趣意貫徹是非成功ヲ奏せらる度与ノ言上即夜願之通御暇廿五日迄之期日を以御紙面ニ相成る

一廿三日尾老公昨日御暇相成居候處今日ハ尾越公より言上之趣被爲在御一同御參

朝御願ニ相惣御參

内ニ亦言上之趣ハ尾越共ニ下坂仕必死之盡力仕度候付從
朝廷御沙汰之御紙而頂戴仕度云々尤前條之通草案ヲ以御願相成候得
共別也

朝議六ヶ敷及徹夜候

但是迄於 小御所御評議之節ハ下參與一同列席ニ亦候處此御評議よ
り越土公より言上之旨有之列席無之候事

一廿四日曉天退散八字比岩倉卿より被召尾越土三公より頻被相迫後藤從
亦盡力徳川氏ヲ助ケ實ニ意外之次第ニ候今日夫何也ノ筋御決定なくて
不叶候間御達之御紙面ニ付不可動之議を決し是を以御受難出來候ハ、
最早不得止候ニ付尾越周旋ハ差置

朝命ヲ以斷然可被相達趣を以御押切可相成候間草案相認差上候様就
御沙汰左之通ヲ以一字一點も御添削不被爲在様言上差出候

一今般辭職被 聞食候付亦夫 朝廷辭官之例ニ倣ひ前内大臣ト被

仰出候事

一政權返上被 聞食候上夫御政務用途之分徳川領地之内夫々取調之
上天下之公論ヲ以返上候様可被 仰付候事

右朝議被相決御草稿被爲調下參與中一同拜見仕候様御下ケ相成候

一今日越公尾公御名代成瀬隼人正參 朝於 小御所御評議被爲在右御
文字三四字御改被下度趣大ニ御迫り左様候上於徳川氏奉違背候得夫
迎もいさし方無之其上ハたとひ追討を被命候共不得止候付

朝命之儘可奉畏親藩ノ儀も夫切ト存候間其段ハ御一同様ハ明白ニ申
上置候間何卒言上通ニ被 仰付度尤廿五日より一七日ヲ限り御受可
奉申上若其期日ヲ相廻せ候ハ、斷然

朝命ヲ以追討を被命候共如何も思召通被成下度との言上之由
一後藤ニハ内輪を周旋し言上通御文面御改被下候上若違背仕ニおひて
ハ是迄も色々申上候得共徳川氏ヲ見捨候外無御坐候間最早斷して追

討之先鋒可奉願候尤伏見巡邏も直様差出可申巡邏ノ一條ハ伏見ハ新撰組奉行所ハ入込段々横行之次第有之士藝長御國ハ鎮撫ノ爲巡邏被仰付候處土藝御斷申出候由國元にも乾泰助等兵隊を取寄候手筈ニ付是非奉願通御許容被下度云々

一 右ニ付岩倉公等ハ別ニ御盡力ニ候得共議定職中ニおひて中山卿始メ動き候ニ勢不得止左ニ御文面ニ相改候由

一 辭職之條同

一 政權返上被 開食候上ハ御政務用途ニ分徳川領地ノ内より夫々取調之上天下ニ公論ヲ以御確定可被爲在候事

右爲心得相達候様 御沙汰候事

十二月廿四日

右ニ通御決定ニテ越公御受尾公ハ成瀬御受明廿五日より御下坂一七日を限り御達相成候旨下參與中ニ被 仰聞候事

一字和島侯昨日御着京今日御參之事

一 廿五日尾越公御下坂之事

一 廿七日五卿御着京御一同御參 朝之事

但壬生卿御所勞ニ御不參

一 今日巳刻より於日御門前土藝長御國調練被遊 寂覽候事
但御國人數千五百人位ニ御調練別ニよろしく壯觀不可謂

三條前中納言

宇和島少將

右議定職

東久世前少將

右上之參與

學習院儒

中 沼了三

長州藩

廣澤兵助
井上聞多

右下之參與

前書之通被 仰付候 思召ニ付此段一應御沙汰候事

右今晚中御答御申出相成候様御下問ニ付御存寄不被爲在候旨太守公より御答御申出相成候事

但四藩同様御下問之事

一 德川氏下坂后鎮撫之儀ハ扱置直様伏見に新選組并歩兵千人餘繰出し奉行所に入込ミ横行いさし町中苦情甚敷四藩に巡邏ヲ被命直様御國人數差出長も同斷然處德川氏兵士ハ奉行所に相構へ一人も外出不致此方人數ハ所々宿陣ニ而對陣ノ形トナル

一 廿三日凡る引拂候トノ説

一 淀城内に戸川伊豆守一番一連隊千二百人町宿陣或ハ寺陣

一 橋本の銃兵三百人位大砲三四挺

但西融寺外二ヶ寺に百五十人位ツ、十八日夕方繰込ム

一 西ノ宮に歩兵五百人位

一 兵庫に若州勢千人位

右之通所々分配し殊ニ京師近傍迄戎兵ヲ繰出し候儀絶言語候次第也但必定鎮撫不相調形ヲ見セ且ハ兵威ヲ示シ壓倒セントノ意ニ出ルナラン

一 紀州勤 王ヲ唱候事

右之是迄尊幕ヲ主張致し候三浦休太郎津田某暗殺ニ逢死ニいさらまテ歸國いさし正議之論相立安藤ノ類等國論ヲ盛返し有志之者ヲ擧けらば横井次太夫与中者杯上京ニ而追々面會いさし候處随分模様ハ變し候様子ニ御坐候紀州も此節依召大坂迄出掛り候處稱病氣滯坂歸國之御暇願出被免候兩端ニわさり候歟も不被圖候得共歸國いさし候得

一 德川氏勢ハ余程弱リ候場合ニ御座候

一 彦根も同様勤 王ヲ唱公卿方ハ愁訴歎願之由

一 因州も同斷

右三條實行ヲ御責相成候事

一 備前も大ニ國論變 王師舉リ候得テ打テ出候迄ニ決定之由

一 其餘畿内小藩等類ニ 王事ニ勤勞セン事ヲ願出候事

一 加州候上京相成居候處九日一舉ニ亦例ノ通逃下リ候事

一 去ル十二日九門内警衛ハ新古共ニ解兵相成別段ニ日御門土州御臺所

御門前御國南門尾州朔平御門前藝州固メ被仰付洛中外巡邏被仰付候

事

一 長州蛤御門固被 仰付候事

一 廿三日德山侯着廿六日參 朝之事

右之通今日迄大略之形情申上候多少之事實紙上ニ難盡御洞察可被下

候以上

十二月廿八日

大久保一藏

蓑田傳兵衛殿

大久保利通文書卷七

一六九 西郷吉之助への書翰 明治元年正月二日

(大久保家藏)

【按】徳川慶喜ノ上京ニ付キ開戦ノ已ムヲ得サルヲ告ケタルモノナリ

拜見別紙一覽之上返上仕候然も尙亦退る及熟考候處今形慶喜上京相成候
るま實以難取返次第ニ立至候ハ必定候付是非會桑歸國取計上京与申今日
之御達振ならてハ難相濟奉存候若無其儀上京相成候得ハ戦ハ窮る出來不
申今日ニ相成候もハ戦ニ不及候得ハ皇國之事ハ夫限水泡ト相成可申就
ハ猶勘考之次第も御坐候付明朝早目參上可仕候ニ付さま様御承知可被下候
事理ト勢与ハ未然ニ相察斷然盡死力不申候もハ勢不及日ニ至り窮策ニ出
候様ニもハ甚遺憾之至ニ候ハ後や深思熟慮いゝさまんてあるをあらは場

合与私ニおひてハ決定仕候幾重も篤与御賢考被成置可被下候委曲明朝拜晤可申上候得共乍序此由可得御意候頓首

正 二

【解説】是時ニ當リ會桑以下ノ兵ハ大坂ヲ發シ鳥羽伏見ニ迫リ慶喜モ亦將ニ上京セントス依リテ利通ハ是日朝議ニ列スルヤ先ツ會桑ノ兵ヲ歸國セシメタル後慶喜ノ上京及ヒ參朝ヲ許スヘキヲ以テセシカ尾越土ハ之ニ反對シテ議決セス漸ク岩倉公ノ決斷ニヨリ尾越兩侯ヲシテ慶喜ニ奉命ノ爲メ單獨上京ノコトヲ傳ヘシム是ニ於テ利通ハ大ニ尾越土ノ舉動ヲ疑ヒ若シ此ノ如クニシテ遷延センカ大政維新ハ遂ニ畫餅ニ屬スヘキヲ以テ斷然戰ニ決シ機先ヲ制セサルヘカラストテ此夜本書ヲ飛ハシテ西郷ニ決心ヲ告ケタルナリ

【參考】其一尾越兩侯への内命書明治元年正月三日

尾張前大納言
越前宰相

兩藩迄御内意之廉徳川内府愈奉行可致之趣全盡力之事被思召候依之
夫兩事件上京自分言上ハ勿論之儀其上參朝御沙汰ニモ可相成候得共
外ニ兼之言上之會桑歸國之儀早々及處置候後上京可然則鎮定之道顯
然ニ付旁此段取計有之候様御内命候事

正月三日

【參考】其二西郷吉之助より大久保への書翰明治元年正月三日 (大久保家藏)

今曉伏見出張之坂本廉四郎より問越候趣は會并松山志州鳥羽之人數
武裝にて着伏相成登京之模様有之候付土州長州と相談いし一應及
談判勿論何分

朝廷之御沙汰被爲在候迄は相控候様可取押候へ共押之罷登候ハ、
防戦に可及との趣申遣候付早々出殿様子相待居事に御坐候いまは長

州引合候處に於て無之二之手繰出し等之手配にて御坐候早々御出勤
可被下候いまゝ如何模様は不相分形行は
朝廷に御届申上置候間右様御含可被下候

正月三日

西郷吉之助

大久保一藏様

【解説】是時越候ハ家臣中根ヲ岩倉公ニ遣ハシ慶喜上京セハ速
ニ議定職ニ補セラレンコトヲ以テセシカ恰モ慶喜會桑兩藩ノ
兵ヲ率キ大舉上京ノ報頻リニ朝廷ニ達シ中根失望倉皇辭シ去
レリト云フ是ヨリ先キ西郷ハ京坂ノ形勢ヲ探知シ専ラ伏見鳥
羽ノ警衛ニ力ヲ盡シタリシカ三日ノ曉天幕兵伏見鳥羽二道ヨ
リ入京セントシ愈危機一髪ノ間ニ迫リタルヲ以テ西郷ハ直ニ
其旨ヲ朝廷ニ上申シ諸軍ノ部署ヲ定メ之ヲ利通ニ報シタリ

【参考】其三西郷吉之助より大久保への書翰明治元年正月三日 (大久保家藏)

今日ハ御叱を可蒙事と相考候得共戰の左右を承候處たまり兼伏見迄
差越只今罷歸申候初戰の大捷誠に

皇運開立の基と大慶此事に御坐候兵士の進も實に感心之次第驚入申
候追討將軍之儀如何ニ御坐候哉明日は錦旗を押立東寺に本陣を御
居被下候得々一倍官軍之勢ひを増し候事に御坐候間何卒御盡力被成
下度奉合掌候頓首

正月三日夜

西郷吉之助

大久保一藏様

【解説】戰端愈破裂ニ及ヒ西郷ハ伏見ノ戰地ニ至リ即日歸邸利
通ニ戰況ヲ報シ征討大將軍ノ出馬ヲ願ヒタルナリ

一七〇 外國公使上京に關する御沙汰書案

明治元年(岩倉家文書)
正月二日

【按】徳川氏ヲシテ外國公使等ニ上京ノコトヲ達セシメントシ

テ起草セルモノナリ

政權返上被聞召候上、外國交際之儀於朝廷條約御取結可被爲在候儀、當然ニ候間百事御治定之上御談判之品も可有之差當り、王政ニ被爲復候御廉御布令被遊度思召候付兵庫滯留各國公使京地へ御呼登相成候間是迄之手續も有之候付上京候様可相達御沙汰候事

但日限之義來ル十日限上京候様被仰付候御受之届早々可有之候事

【解説】王政復古天皇親政ヲ締盟各國ニ宣言ノコトハ利通ノ最

モ主張スルトコロナリシモ議容易ニ決セサルヲ以テ利通ハ岩倉公ニ進言シ斷然各國公使ヲ上京セシムヘキヲ以テス依リテ岩倉公ハ國際交渉ハ從來幕府ニ於テ處理セシ關係アリ故ニ今回タケハ徳川氏ヲシテ各國公使等ニ上京ノコトヲ達セシメントシ御沙汰書ノ草案ヲ提出スヘキヲ命ス利通ハ乃チ西郷岩下ト議シコノ案ヲ認メテ提出シタルナリ初メ正月二日朝議アリ

慶喜ヲシテ諸外國公使ニ召命ヲ傳ヘシメンコトヲ議ス其案ニ曰ク

大政御執行ニ付テハ外國事件於朝廷御處置被遊候ハ勿論且重大急務之筋ニ付此間中段々御沙汰モ有之候得共其廉モ未被行實ニ一日不可忽之次第ニ付別紙之通徳川内府へ被仰下候儀ニ御確定候此段御沙汰候猶所存之趣も候ハ、言上可有之候事

但外國事務掛初夫々其人體可被置候間是又心得迄ニ申入候事

右ニ謂フトコロノ別紙ハ即チ利通ヨリ岩倉公ニ提出セル本書ヲ指ス然ルニ此時幕兵上京ノ報アリシヲ以テ議事ヲ中止シ九日ニ至リ仁和寺宮嘉彰親王ヲ外國事務總裁ニ三條實美東久世通禧兩卿ヲ外國事務取調掛ト爲シ十五日東久世卿ハ神戸ニ於

テ岩下寺島吉井伊藤陸奥等ヲ隨ヘ佛英伊米普蘭ノ六國公使ニ
會シ國書ヲ授ケ將軍大政ヲ奉還シ天皇萬機ヲ親裁シ玉フ旨ヲ
告ケ仍ホ從前ノ條約ハ凡テ之ヲ新政府ニ於テ遵守スルコトヲ
通達セリ是ニ於テ王政復古ノ對外宣言ハ初メテ決行セラレタ
ルナリ

一七一 岩倉公へ呈せし意見書 明治元年正月三日 (牧野伸顯藏)

【按】朝廷ノ失計ヲ數ヘ速ニ開戦ニ決スヘキヲ論シタルモノナ
リ

去ル九日

朝廷大御變革

御發表之形體ヲ熟考せるニ既ニ二大事ヲ被失候而皇國之事十ニ七八ハ不
可成与歎息涕泣以テ候折柄將ニ三大事ヲ失セラレントス三大事共ニ被

失候へハ

皇國之事凡る瓦解土崩大御變革も盡ク水泡畫餅ト可相成ハ顯然明著ト以
ふるし

皇國を奉深憂之もの豈必死ヲ以テ盡サ、ランヤ抑一大事ヲ被失候トハ九
日 御發表盡ク御内評通斷然 叡慮ヲ以テ德川氏御處置會桑進退等 御
達之御都合ニ運兼衆評被聞食候御事与相成德川氏ヲシテ即夜參 朝御評
議席ニ可被召ト之趣越土公或ハ後藤杯必死ニ論シ漸クニシテ是ヲ論破シ
尾越ノ周旋御受与相成タル時宜合是第二等ニ陥リタル基ニテ畢竟衆評ニ
涉ラス確斷ニ出候へハ第一等ノ策ニ萬々疑ナカリシニ被失候御大事ノ一
之第二ニハ德川氏爲鎮撫下坂ト申表面ニ而内實ハ華城割據ノ勢ヲ成シ歸
國セシムルノ御受ヲ成シタル會桑ヲ滯坂セシメ剩ヘ要所々々警衛公然申
達シ兵士ヲ差出シ洛中同様ノ伏見淀城迄多人數兵士繰登セ
朝廷ニ 御趣意ニ乖戻不遜ナル紙面ヲ以テ外國ニ相達シ候次第恭順反正

ノ趣意ナラサルハ分明ト云フヘシ然ニ舊臘廿三日廿四日
朝議之節兩事件確定ニ
叡慮通御紙面ヲ以テ被 仰出候處眼目ニ御文字依願第四五等ノ策ニ御改
相成候義必定徳川氏ヲシテ上京セシメ然シテ同意ノ藩ヲ語ラヒ勢不可得
止ノ機會ヲ拵ヘ

朝廷ヲ奉壓倒意ニ儘ニ可遂ニ深策有之事候處是ヲ看破シテ押ヘ給フ事不
能被失候御大事ノ二ナリ將ニ失セラレントスル第三ニ御大事ハ此儘徳川
氏上京相成候得ハ參朝ニ無申迄議定職被 命候事合心同力ヲ以扶幕ニ徒
必死ニ盡力致シ候半是迄サヘ二大事ヲ被失候次第ニ候得ハ中々以テ
朝議不動ト申議不被爲叶ハ鏡ニ懸テ明ニト云フヘシ若 御動搖被爲在ニ
おひてハ

朝廷上一ニ御變動アツテ依然タル 御衰體ヲ見給フ而已ナラス
皇威豈ニ地ニ不墜ヲ得ンヤ是三大事ヲ失セラレントスルノ危急ナリ右ニ

就而是ヲ救ヒ返スニハ勤 王無二ノ藩決然干戈ヲ期シ戮力合體非常ノ盡
力ニ及ハサレハ不能ト被存候今在京列侯藩士因循苟且ノ徒而已就中議定
職ニ御方下參與職ニ者具眼ノ士一人も無之平穩無事ヲ好シテ諛言ヲ以テ
雷同ヲ公論ニナシ周旋盡力スルノ次第實ニ憤慨ニ不可堪依之愚考スルニ
干戈ヲ期スル決定ニ至リ候得テ公然明白

朝廷ニ盡シ奉ラスンハ萬成スヘカラス長藩ノ議ニ長薩ノ
朝廷タルヤフニテハ不相濟トノ論一通リ當然トハ相考候ヘ共如此 御急
迫ニ臨ンテ左右顧念アルヘキモノナルカ戰ニ成ル程ノ見定相付候上ハ相
與ニ參與ノ御受ケテ被致必死ヲ盡シ度被存候一藩ノ微力ヲ以テ迎モ衆多
ニ不及今日ノコ不及候得ハ施スニ術ナカルヘシ

一、外國ニ徳川氏示諭ニ紙面 君家ニ事ヲ擧ケテ惡事トシ猶己ニ罪ヲ置テ
他ヲ凶暴ト唱ヘ候條實ニ不可捨置ニ大事ト奉存候間猶御評議ニ御懸被成
候様有御座度愚考致シ候

右玄實ニ切迫ニ御大事与相成候ニ付幾重ニモ粉骨碎身盡サスンハ不可有
ト愚考仕候以上

正月三日

大久保 一藏

【解説】利通ハ王政復古ノ大號令煥發以來朝廷再々ノ失計ヲ痛
嘆セシカ今又慶喜大坂ヨリ東上ノ報アリ而シテ越土等ノ舉動
モ亦大ニ疑フヘキモノアリ朝廷ノ更ニ三度失計ヲ重ヌルニ至
ランコトヲ憂ヒ斯クテハ大事遂ニ去ルヘシトナシ速ニ開戦ニ
決スヘキヲ論シタルモノニテ先ツ西郷ニ示シ後岩倉公ノ邸ニ
持參シ切ニ朝決ヲ促シタルナリ

一七二 三條岩倉兩公に呈せし覺書 明治元年正月三日(岩倉家文書)

大政復古ノ事速ニ宜ク外國公使ニ照會シ其ヲシテ上京セシムヘシ
慶喜反狀已ニ顯ル宜ク速ニ大兵ヲ伏見ニ出シ及ヒ禁門守衛ノ諸藩ニ命シ

戒嚴セシムヘシ

嘉彰親王ヲ以テ征討大將軍トシ錦旗節刀ヲ賜ヒ禁衛ノ兵ヲ指揮シ伏見ノ
報ヲ待ツヘシ

高野山屯集ノ官軍ニ令シ大坂ニ進攻シ及ヒ紀伊藩ニ命シ勤王セシムヘシ
備前因幡兩藩ニ諭スニ慶喜反跡漸ク顯ル宜ク勤王ノ兵ヲ備ヘ後命ヲ俟ツ
ヘキヲ以テスヘシ

列藩ニ征討ヲ布告スヘシ

藝因備及ヒ彦根平戸大村佐土原藩在京ノ兵ニ東兵防禦ヲ命スヘシ
尾越二藩ニ禁闕警衛ヲ命シ人員足ラサレハ在邑ノ兵ヲ召集セシムヘシ

【解説】本書中ニ高野山屯集ノ官軍云々トアルハ慶應三年十二
月十二日侍從鷲尾隆聚宣旨ヲ奉シ高野山ニ登リ檄ヲ四方ニ傳
ヘ諸藩ノ志士ヲ糾合シ十津川郷士ヲ初メ千餘人其麾下ニ來會
セルモノヲ云フ

一七三 三條岩倉公等に呈せし覺書 明治元年正月三日(岩倉家文書)

【按】伏見ニ於ケル警衛兵ト幕兵トノ問答ニ關スル布告案其他緊急時局ノ對策ニ關シ條項ヲ列舉シ建言セルモノナリ

一 土長薩人數三藩ニ於伏見坂兵ハ引合何様之譯ケニ御出張ニ相成候哉相尋候處

彼云德川氏就上京先手被命上京いさし候

我云成程御先手之命御受相成候共朝命之旨有之警衛いさし候付御上京之儀何分 朝命有之迄之御控有之度若押之御通行候得之相應御會釋可申上云々

彼云尙德川役筋之者之相談何分可及御答ト云々

右旨相達候事

一 外國公使之上京被命候儀斷然御施行之事

一 伏見迄大兵繰出し且會人數黒谷の追々クリ出シ入候之叛逆不可疑候

付 禁闕警衛土尾藝薩の早々改之御沙汰之事

但兼之四門警衛蒙命有之故也

一 仁門公の早々征東將軍之命ヲ下サレ今日より戎服ニ而 禁闕警衛之人數指揮被爲在伏見一左右次第御進軍之事

但進軍之節節刀ヲ給ハリ錦旗を翻し官軍之威ヲ輝し候事

一 高野山屯集之官軍華城の進討可責落命を被下候事

但紀州の同斷御達本文官兵合力同心王事勤勞いさし候様

一 備州因州の德川叛逆之色相顯追討被 仰付儀も可有之候間於本國用意いさし事有ルノ日 王事勤勞可致早々御達可有之事

一 列藩の大ニ御布告之事

一 平戸大村佐土原藝因備彦根の東兵防禦被命候事

一 尾越の 禁闕警衛被命人數及不足候ハ、早々國兵クリ出シ候事

【解説】利通ハ本書ヲ認メテ參朝シ三條岩倉東久世三卿ニ提出シ且ツ大ニ其急務ヲ論述セシカ三條公等ハ之ヲ賛シ更ニ利通ヲシテ總裁有栖川宮ニ之ヲ稟申セシム依リテ利通ハ直ニ宮ニ謁シテ上陳シ宮モ亦之ヲ嘉納セラレ舊幕兵ノ上京ニ備ヘシカ續テ官軍ノ捷報頻リニ至リ朝廷初メテ心ヲ安ンセラレタルナリ仁門公ハ仁和寺宮嘉彰親王ヲ云フ

一七四 岩倉公に呈せし覺書 明治元年正月三日

(岩倉家文書)

- 一 大津官軍公卿方ヨリ總督被命候事
- 一 肥藩宇和島東軍防禦被命候事
- 一 丹波口へ公卿方總督被命人數繰出候事
- 一 藤堂へ御沙汰之事
- 一 仁門公追討將軍之命ヲ下サレ節刀ヲ賜リ明日中御進軍之事

【解説】丹波口ハ山陰道方面ヲ云フ藤堂へ御沙汰云々ハ當時津藩ノ兵幕命ヲ以テ山崎關門ヲ守ル利通ハ建策シテ特ニ朝命ヲ下シ官軍ニ應セシメントシタルナリ五日朝議ニヨリ公卿一人ヲ遣ハスコトニ決シ四條隆平卿自カラ進ンテ其任ニ當リ藩兵ヲ諭シ勤王ヲ誓ハシメ翌六日北上ノ幕兵ヲ八幡橋本ノ間ニ横撃シ幕軍之カ爲メニ大敗セリ四日朝廷ハ仁和寺宮ヲ征討大將軍ニ任シ錦旗節刀ヲ賜ヒシカ宮ハ薩長藝三藩ノ兵ヲ從へ出陣シ東寺ヲ以テ本營トセリ

一七五 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年正月五日 (公爵島津忠承君藏)

【按】舊臘二十八日以後ノ形勢ヨリ開戦ニ至リシ始末及ヒ戰爭ノ經過ヲ藩廳へ報告シタルモノナリ

中將様益御機嫌克被遊御坐大慶奉存候猶御當地

太守様御同然被遊御坐御同慶奉存候舊臘廿八日追々形勢々申上候通御座候德川氏尾州越州公之御盡力ニ而兩事件御受上京ノ上被遂

奏聞ト之趣舊臘晦日言上相成候處去ル二日猶亦

朝議被爲在兼而言上之會桑未歸國不致候ニ付早々歸國取計鎮定之實跡舉

り候上慶喜上京候様御沙汰相成る御評決ニ御坐候處例之通後藤杯異論相

生し當日御運不相付候翌三日坂兵大軍伏見迄進入會桑高松戎服ニ而大砲

押立追々ニ到着上京いゝモトノ事故兼而同所出張巡邏被 仰付置候三藩

薩土ヲ以引合ニ及候處德川氏上京ニ付先手之命ヲ受上京致候ト之返答ニ

亦然ラハ

朝命ヲ以警衛被 仰付置候付何分

御沙汰有之迄之間御差控可被成段申入候處書通ヲ以テ押而致上京候段相

答候由右引合之次第當日早朝相成候付則

朝廷へ御届ニ及候處尙尾越へ是迄之手續も有之候廉ヲ以斷然大坂迄爲引

拂候様盡力可致旨ヲ早々

朝命有之且兼而伏見出張之四藩へ尾越御達之趣も有之候ニ付若背命不得

止時宜ニ及候節々云々御達之御紙面相下リ候然處同日七ツ時分鳥羽街道

鶴橋邊ニ而始戦ト相成續而伏見奉行所邊及砲戦候趣追々注進有之終ニ干

戈ト相成候次第ニ御座候

一鳥羽街道之方見廻役与稱し候得共專會津桑名ノ人數ニ而大砲等押立進

入候間此方より申入候々

朝命ヲ以通行不相成候段一應々及應接候得共押而進入いゝし候段相答

候ニ付則砲發ニ及候由固より於伏見三藩より引合押而入京之段書通ニ

而返詞有之押而通行候得ハ及干戈候旨を而相答置たるよしニ候得々始

戦之處ニおひても曲直分明ある譯ニ御座候扱成敗之上ニおひても連日

之戦一度も敗軍無之今日淀城迄責詰賊徒敗走官軍別而相振淀も官軍ニ

屬し候由

一 昨四日 仁門公へ征東將軍ヲ被命節刀ヲ賜リ烏丸卿東久世卿に參謀被命錦之御旗被飄未刻頃御進軍被爲在候次第固より壯烈之宮ニ在しく候得去嚴威當りを拂ひ只々忝しけなさの感涙ヲ催し候外無御坐候昨夜東寺へ御宿陣ニお今日早々淀近邊迄御進軍被爲在誠雄々數御振舞官軍之振起いとし候程御觀察可被成候

一 御國兵隊之猛烈進戰誠ニ紙筆ニ難盡聞人見る人舌ヲ卷さるハ無之候初戰之處御大事ニ候得て實ニ握掌いとし居候處注進之度毎ニ捷軍を奏し朝廷ニ奉對候る去勿論諸藩ニ對候るも御國之美目無此上難有次第御同慶此事ニ奉存候土藩おとも十分之戰ニ不至合力一體決死ヲ以憤戰するハ長州而已ニ御坐候

一 山崎ノ固メ藤堂ニお候處是も官軍ニ屬候依る今日藝州へも固メ被 仰付出張之賦御坐候長より之應接ニお動し候譯ニ御坐候依之八幡山崎ハ官軍を以取固メ候ニハ相違無御御坐候賊之勢ヒ大ニ挫可申候是ヲ固付

候得去華城之巢窟もたまり得申ましく候

一 大津へ橋本卿柳原侍從殿爲

勅使被差立熊本彦根佐土原大村備前人數發向ニお相屬し候彦根ハ掃部頭よほと憤發ニお是非實行ヲ擧ケ罪ヲ償ひ候と之事ニ御坐候實ニ世ノ中ハ意外あるものニお御坐候是ハ關東より東海道ヲ人數繰出候故防禦ノ爲ニ候既ニ草津迄大隊ノ歩兵到着ノ由被相聞候

一 備前因州官軍ニ相違無御坐候備本末共ニ大津へ出張大ニ相振ひ申候因州ハ本末山崎へ出張同斷相振ひ申候懸る去御疑念も可有之候得共勢ひハ言外ニあるものニお實ニ

皇威振興 神州地ニ墜さる所以と被存候紀州も愈憤發奉勅之向ニ御坐候鷲尾卿被奉内勅浪士或十津川士等相募り高野山ニ屯集凡千人餘之官軍ニ相及候處紀州より及贈品相互ニ爲

皇國可致盡力旨ヲ以使節迄相立て候中自然勢ニ依て反し候場も可有御

坐候得共何ニせよ御威光之然る所以ニ不堪欣喜事ニ御坐候尼ケ崎高
槻同斷ニ是等ハ小藩トいえとも別ニ要所之事候處山崎路ハ道を開き
候様ニ相成候

一 丹波路之方西園寺卿爲

勅使被差立長藩御國人數相屬し今日御發向相成候是ハ三丹ヲ占メ萬一
之節

鳳輦之道を開候爲之固より山陰道列藩へ直様

勅命ヲ以 御沙汰相成居一公卿御差向ひ相成候得之悉ク官軍ニ相屬し
候模様有之候故右之御計ひ相成申候長州ハ雲州路より中國ヲ攻上り候
手筈有之候

一 今日刑部殿上京兵庫滞留各國夷情委曲相分申候去ル二日平運丸開帆之
處幕船より及砲發其儘兵庫港引返し候由「ラウダ」「モンブラン」より相諭し
候ニハ是非談判ニ及ぶるし如何様之儀有之候共港内ニ及砲發候事ハ

萬國公法ニおひて無之事ニ候江戸之事も固より曲在彼且此一條十分之
曲ニ候若應接之上六ヶ敷クハ夷人ハ可任ト申たる由最 王師被起候
ニ付何をへも荷擔不致筋評議決定ニ及候と之事

一 京師中ハ幸干戈不動兵火之變御坐なく糧米等二條城等之貯も有之

朝命ヲ以夫々御取調相成候若糧米等差支候節ハ申出候様 御沙汰も承
知仕候尤彦根官軍ニ屬し候間江州之道相開ケ候間暫大坂之通路相絶候
とも決る差支無御坐候仍米穀ハ餘分ハ凡る伏見邊兵火之者救米京地市
中等へ配當被爲在候御内評ニ御坐候

一 明日徳川之逆罪之次第朝敵たるヲ以瞭然相鳴し天下ハ大號令 御發表
之御評決ニ相成申候爲鎮撫下坂ト表向を決くろひ則籠城割據之形ヲ成
シ新柵ヲ結ひ要所ニ公然警衛を命し且外夷へ

朝廷之惡を示し暴戻之所爲抔との文面ヲ以布告ニ及候次第等重罪顯然
たる事殊ニ御當地戰爭前日ニ當り於攝海砲發ニ及候儀各國公使群集之

中ニ亦公法ニ戻りたる所爲宇内ニ曲を廣め候譯ニ亦大ニ我の幸ト可申候

右大略之形行申上候

朝廷より之御達書且戰爭之御届死手負等或ハ分捕打取等之員數夫々從政府御問合可有之候間態ト相略見聞之及候丈相認晝夜之參朝ニテ許多之事情難申盡宜敷御洞察被下被達尊聽候儀共以賢慮可然奉願候頓首百拜

正月五日夜認

大久保一藏

養田傳兵衛様

侍史

【解説】大坂ニ在リタル舊幕兵ハ舊臘江戸ニ於テ庄内上ノ山等ノ兵カ三田ノ薩邸ヲ燒討セシトノ報ヲ得愈戰意ヲ決シ討薩ノ表ヲ齎ラシ大舉上京スルニ至レリ書中兩事件トハ慶喜ノ辭官

及ヒ納地ヲ云フ又當時利通西郷等ハ幕軍北上ノ報ニ接スルヤ萬一ヲ慮リ長藩ノ廣澤ト議シ若シ官軍利アラヌ幕兵京都ニ入ラハ三條中山ノ二卿ハ車駕ヲ奉シ密ニ京都ヲ出テ薩長二藩兵之ヲ護衛シ山陰道ヨリ藝備ノ間ニ出テ征討ノ詔ヲ四方ニ下シ以テ勤王ノ兵ヲ糾合シ回復ヲ計ルノ方策ヲ定メシカ官軍大勝ヲ得タレハ遂ニ此等ノ秘策ハ實行スルニ至ラサリシナリ又當時利通ハ西郷ト共ニ朝議ニ於テ頻リニ討幕ノ英斷ヲ主張セシカ之ヲ賛成スル者僅ニ數人ニ過キスシテ皆兩端ヲ抱キ利通等ニ對シテハ殆ント言語ヲ交ユル者ナカリシカ愈戰ヲ開キ官軍大勝ヲ得タルノ報達スルヤ朝廷ノ形勢忽チ一變シ利通西郷等ノ前ニ爭ヒ來リテ相祝シ歡フ者俄カニ群ヲ爲セリト云フ又當時形勢ヲ觀望シタル諸藩モ此ノ一戰ニ依リ愈藩論ヲ確定シテ續々官軍ニ歸屬スルニ至リシナリ書中ノ西園寺卿ハ公望刑部

ハ薩藩家老新納久修ナリ又「ラウダ」ハ英國領事「モンブラン」ハ佛人ニテ岩下等ト共ニ去年十月來朝シ薩藩ノ關係ヨリシテ外交上朝廷ノ爲メニ少ナカラス盡力セシモノナリ仍ホ下ニ掲タル参考書翰中英國醫師トアルハ「ウイリス」ニシテ當時ノ英國公使館附醫師ナリ「ウイリス」ハ此ノ時入京シ大ニ官軍ノ傷病者治療ニ盡力スルトコロアリタリ

【参考】其一西郷吉之助より大久保への書翰明治元年正月廿四日(大久保家藏)

尚々本書ハ御返し可被下候

別紙ニ通大坂より申來候付御願書被差出候義ハ早々取計申候間宜敷御都合向ハ御願申上候山崎邊御固場所ハ早速人差遣 朝廷ハ御願申上候間英國醫師相頼取入度候趣申斷置候様相達差出申候伏見迄ハ幸輔出迎ニ參り可吳との事ニ御坐候間左様御含可被下候野津七左衛門今朝卒度歸來候付承候處彼隊伏見迄出迎ニ筋を以京地までハ警衛

いふし罷歸賦ニ御坐候間七左衛門早々伏見邊ハ引戻させ山崎邊固場所等ニ都合も爲致置申候御願草稿差上置候此旨得貴意候頓首

正月廿四日

西郷吉之助

大久保一藏様

要詞

【参考】其二薩藩より朝廷へ上れる願書草稿明治元年正月 (大久保家藏)

御願書草稿

此度戰爭ニ付手負之者夥敷御坐候處療養炮創未精處より追々及死亡候者不少實ニ不被忍次第ニ御坐候就ハ其術を究治療方穿鑿仕候折柄兵庫滞在英國熟練之醫師頼入申度無據爲致相談候處人命ニ相拘候義不容易事候付速ニ可被差遣旨致許諾候付當邸ハ招呼療治相加度御坐候間何卒入京御免被 仰付被下候様宜敷御執奏奉願候以上

一七六 蓑田傳兵衛への書翰 明治元年正月十日

(蓑田家藏)

【按】本書ハ正月五日以後ノ狀況ヲ藩廳へ報告シ別啓ハ舊幕軍ノ謀略及ヒ官軍振起ノ狀ヲ報シ戰後行賞ノコトニ及ヒシナリ去る五日堀直太郎被差立形行申上置候處其後日々官軍之勢相加同日淀屯集之賊徒悉く退散淀城之儀賊滞陣之趣申觸候得共左にあらず城内には一人も入れざる由ニ點檢を受官軍を迎へ候次第ニ御坐候此日戦も余程烈舖常朝四日ニ追退られ候殘徒鳥羽口迄進出根強く必戦味方手負戦死も相應有之候得共終に官軍之勝利と相成淀にもたまり得ず八幡をさして敗走仍而淀市中は兵火と相成城内無難に相濟候官軍長薩の力に以此同六日官軍益進んで八幡を進撃同所要地故賊も十分に手配りいたし新に砲臺等相構へ八幡宮前人家或は橋本邊關門等迄人數相備へ迎戰候得共官軍薩長短兵急に相懸り盡く破られ關門之儀は搦手之山合より薩長不意を打且藤堂勢官軍に屬し前面より砲發に及び終散々に討成され敗北す關門

之守兵固より若州勢宮津勢を以警衛之上會桑殘兵取合此要地を被取候もえ不相成迎死力を以て小賢く手を廻し用意いたしたる向に候得共終に利あらず此日賊兵死傷不知數と申事我兵も死傷も少々有之候關門は直に薩長兵を以相固め候事

七日枚方迄賊兵落ちたりとの説ニ斥候差出及探索候得共中々同所にも足を留る事不能華城をさして逃去りしと聞ゆ

八日朝大坂邸中詰合之者之由にて越藩兩人八幡先鋒我軍營に來り徳川慶喜始會桑東退いたし候趣演舌就別紙に記有之此一封

奏聞に及筈なり早々薩長之先鋒隊え通し吳候様華城目付役妻木某より頻に相頼と之事候由於大坂は既に同晩守口邊迄薩長先鋒押寄直に華城え急撃いたす与之事に狼狽不可謂實にあはたしく軍艦を以東歸いたし候次第に亦見苦舖體なりとそ凡先鋒隊賊兵は會桑新選宗徒者にて委曲は分り兼候得共二千人餘は有之たるに無相違相聞候處何分頼切たる人數殘少

なに打成され薩長之官軍不可當之勢を相通し候處より切迫し右時宜に相及候事と被察候賊之巨魁打洩したるは別る遺憾に堪す候得共始終官軍之大勝利と相成候段は

皇運彌挽回之瑞と可申候是偏に薩長之粉骨碎身苦戰を成たる故也

一、征東將軍宮え六日晚より小冊隨從仕候翌七日東寺御發途に淀え御入城翌八日御參詣被爲在候也八幡橋本關門等之戰地凡る御巡覽被爲遊隊長共被召出戰之始末御尋問御慰勞被爲在候錦之御旗飄され處々御巡覽に就る老若男女奉迎望難有々々といえる聲流石に一天之

主之御軍はかゝる者と涙を吞候計に御坐候御巡覽先より華城之様子御届相成候付

朝廷上之御模様彌越藩より

奏聞に及候や爲伺小冊其儘歸京仕候處同夜半無相違奏聞相成候事

一、昨九日將軍宮者夜枚方迄御進發先鋒を華城迄被差向報知次第御入城尙官軍之御威光被輝外夷御布令等も可被爲在様

朝議被相決候小冊は被差留大山格之助被差出候大坂へは今早天より御國人數九小隊くり出し長兵も同様差出候然處昨夜華城燒失之段相達先殘兵之所爲と被聞候得共未迄かと相分不申候必處々殘兵も難圖同處次第は出張之者より申上にも可有之候

一、昨日三條卿副總裁外國掛被命候東久世公外國掛被命候

一、徳川慶喜罪狀を鳴し御布告を發するに臨み岩倉卿土佐に御出大議論に被及最早今日を手切と思食候此上扶幕之御考に候は、早々坂地え御下り十分に慶喜を御助可被成少も遺憾無之候是迄通曖昧たる事に不は不相濟候付斷然御處決可有之と御切詰相成流石に閉口に不此上は

朝廷御沙汰次第可奉畏との事に不家中一同えも布告等有之後藤福岡等も承服之由に御座候其餘尾越宇和島等も無子細實に此卿は希代之人傑と可